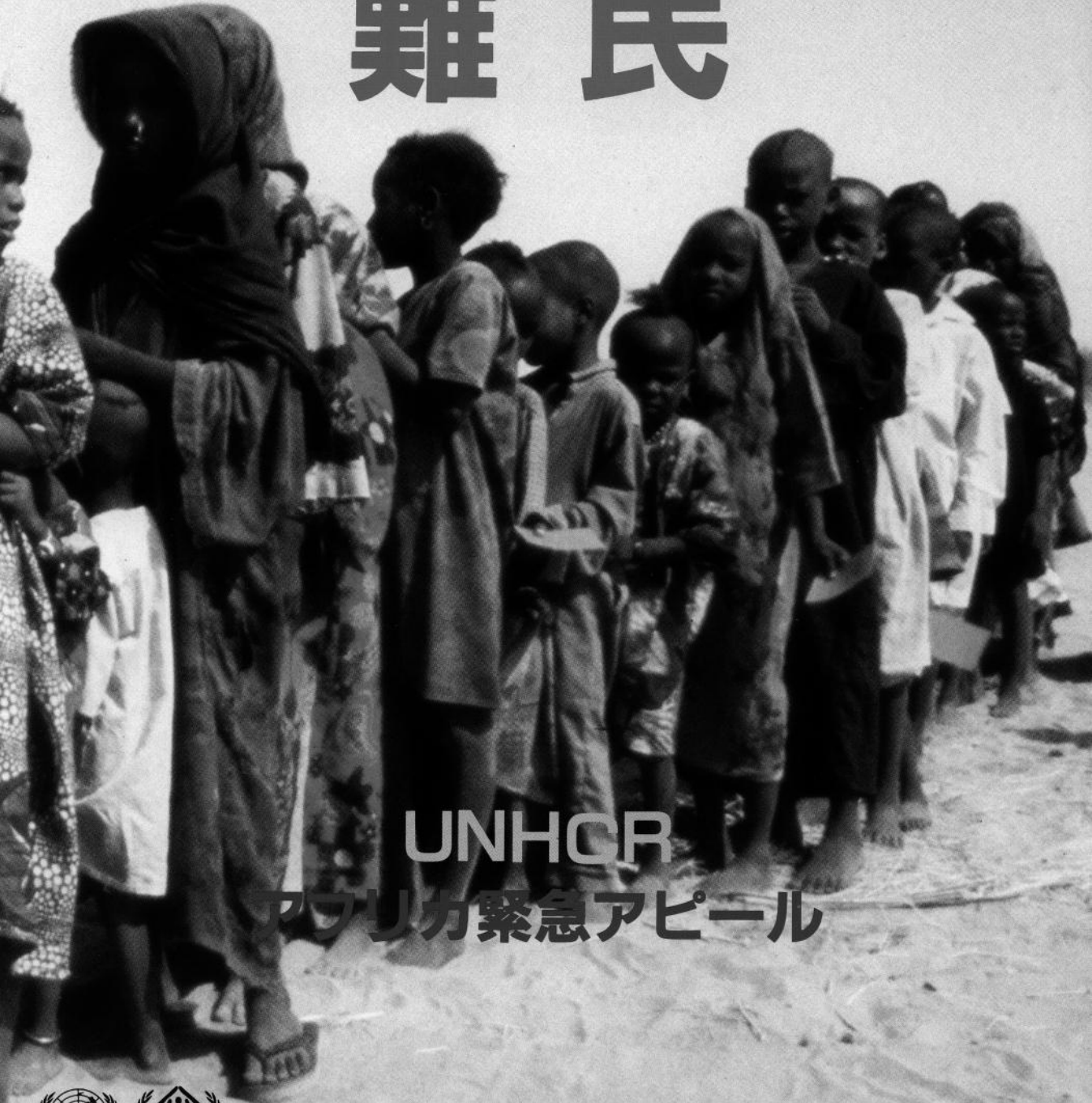


Trial & Error

# 難民



UNHCR

アフリカ緊急アピール



UNHCR

United Nations High Commissioner for Refugees

JVC 特集号  
Japan International Volunteer Center  
No.54



はじめに

アフリカの難民問題が世界の耳目を集めてから久しくなります。現在は救援機関の活動も軌道に乗り、以前のように毎日バタバタと大ぜいの人々が亡くなっていく状況は脱しました。また今年は雨期に雨が降ったので来年の収穫には希望が持てます。しかしアフリカの難民問題はぬきさしならないところまできており、各国の救援抜きにしてはやっていけない状態です。緊急状況であった本年は国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の拠出金も莫大な額に上り、大幅に予算わくを越えてしまいました。その結果“難民の生命に直接影響のないところ”から予算が削られ、他の地域での難民援助活動にも憂慮すべき影響を与えています。また職員は自発的に給与の一部を募金したり、事務費の大幅な削減に努めるなど UNHCR 始まって以来の財政危機に直面しています。

1951年、UNHCRが設置された当初では難民問題がこんなにも恒常的になろうとは予想さえしていませんでした。第2次世界大戦後のヨーロッパにおける戦後処理の一環としての難民問題は、今や全世界に広がり、「難民」である条件も今までの難民条約では該当しなかった戦乱や飢饉による避難民まで含むようになりました。もはや UNHCR は暫定的な機関（5年毎に存続を延長）でありながら恒常的な活動に取り組まざるをえなくなっています。難民問題を根本的に解決するためには、南北隔差の是正、戦争のない社会、環境保護など世界が抱える諸問題の解決をみなければなりません。それにはとほうもない時間とお金がかかるでしょう。私たちは難民問題が日常化し、人々の関心が薄れていくのを恐れます。難民問題は決してセンセーショナルな話題ではありません。問題の恒常化に対しては常に関心を持ち続けていくしかないと思います。

今回の特集号は「各国に定住した難民の法的地位」を予定していましたが、アフリカの緊急状況と UNHCR の財政危機などの理由から「アフリカ緊急アピール」に変更いたしました。なお この号は UNHCR 駐日事務所の協力のもとに編集されました。（本号本文中のドル金額表示は、すべて米ドルであり、換算レートは85年10月現在で1ドル=215円です。）

JVC 編集部

表紙

スーダン西部に流入したチャド  
難民 — 食糧配給に列を作る  
UNHCR/L. Aström

表 2

水供給を受けるソマリアのエチ  
オピア難民 UNHCR/M. Benamar

P. 31

ワドジェリフ・キャンプ（スー  
ダン）で空からの食糧を待つ  
UNHCR/M. Vanappelghem

本文中に訳出された『REFUGEES』  
誌（UNHCRジュネーブ本部広報  
課発行）の記事は、すべて同広報  
課スタッフによりまとめられたも  
のです。

目 次

はじめに.....	3	中央アフリカ共和国.....	20
資金難に直面する UNHCR.....	4	ジブチ.....	21
UNHCR アフリカ緊急援助特別アピール...	5	私の出会った人々—オーストラリア.....	24
東部スーダン.....	6	タイ・カンボジア国境難民村での	
西部スーダン.....	9	栄養調査に参加して.....	28
ソマリア.....	12	JVCとは .....	30
エチオピア.....	16		

## 資金難に直面するUNHCR

UNHCRは深刻な資金難に直面している。ごく楽観的な予測でも、85年中に必要な予算総額が5億ドルであるのに対し、年末までの収入見通しは4億5000ドル余りでしかない。

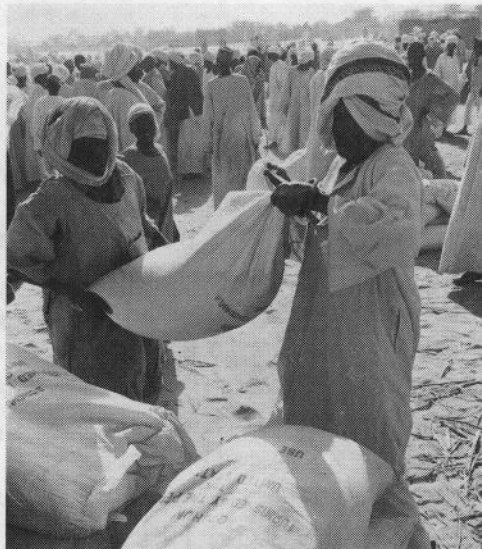
このような憂慮すべき状況にいたった理由は何であろうか。第一に銘記されなければならないのは、UNHCRの歳入は毎年保証されたものではないということである。この点でUNHCRは、毎年一定の歳入が保証されている他の国連機関と性格を異にする。UNHCRの難民援助事業はすべて任意の拠出金によって支えられている。従ってUNHCRは毎年、各国政府、ECや民間団体などと援助資金の拠出に関して交渉をもたなければならない。

10月の執行委員会においてUNHCRは加盟41カ国に対して翌年度の予算を提出することになっている。しかし、この予算案が承認されたからといって、資金が確保されたということではない。UNHCRはその時点から国際社会に働きかけを開始して必要な資金の確保に努力しなければならない。各国政府は11月中旬にニューヨークで開かれる会議において、次年度の拠出額を明らかにすることになっている。

ところで、UNHCRが本年の資金不足に陥ったのにはもうひとつの理由がある。昨年10月の時点では、その後アフリカ大陸で内乱と干ばつが重なり、これほど大規模な難民の流出が起ころうとは誰も予測していなかった。人間の生命を救うことを第一の使命とするUNHCRは、この新たな緊急事態に全面的に取り組まなければならないようになった。UNHCRは中央アフリカ共和国、ジブチ、エチオピア、ソマリアおよびスーダンにおける緊急援助計画を実施するために、国際社会へのアピールを何度となく行っている。これら緊急計画のために総額1億0200万ドルの資金が必要とされているが、この額は1985年末までの差し迫った必要を満たすための予算である。

各国政府と援助機関は即座にUNHCRのアピールに応じ、資金提供を約束した。今日までに寄せられた寄金は総額で7000万ドルに達する。資金拠出側の要望で、本来一般援助計画のために提供される予定の資金が、アフリカの緊急事態に対応するために充当されるといった処置がとられた。それでもなお緊急特別計画のために3000万ドル以上が早急に必要とされている。

全体的にはUNHCRの歳入額は増加してきているが、この2年間に25%以上も増大した必要額を賄うにはいたっていない。その上、ドル高の影響もできてきている。米ドル表示の拠出金額に対応する各国



通貨での金額がどんどん高くなるからである。援助の供与は現地通貨で行われるためある程度の為替差益も出るが、世界中で生じているインフレのために、この差益も大半が消え失せることになっている。

1965年のUNHCRの年間支出は530万ドルであった。ボート・ピープルやアフガン難民の急増、アフリカにおける状況の悪化に伴い、1975年にはその額はすでに6900万ドルに増大し、80年になると5億ドルに達した。83年末には、

経費削減に努めた結果、年間支出を3億9800万ドルにまで減じたが、84年は主としてアフリカの緊急事態により、4億4400万ドルとなった。

本年は、世界各地の難民援助のための一般計画と、アフリカでの重大な緊急計画の双方に対応するためにおよそ5億ドルが必要である。UNHCRの援助は決して贅沢なものではないが、必要な資金が得られなければそのしわ寄せを受けるのは難民で、1986年も深刻な状況が続くとみられる。できる限り節約に努めながら、難民に適切な援助を与えることがUNHCRの義務であり課題でもあるが、国際社会のさらなる努力と支援なしには、UNHCRはその任務を遂行するための最低限の資金をも得ることができない。

『REFUGEES』誌 85年8月号より訳出

# UNHCR

## アフリカ緊急援助特別アピール

1985年 8月26日

中央アフリカ共和国、ジブチ、エチオピア、ソマリア、スーダンの5カ国におけるUNHCRの緊急援助計画全体で1985年末までに必要な資金額は、1億0193万6173ドルである。内訳は、食糧以外の品目を賄うため現金で必要な資金が6344万9694ドルであり、食糧品目で現物かまたは購入費として現金で必要な額が3848万6479ドルとなっている。食糧の確保のために今までに寄せられた寄付は合計2901万9710ドル相当に上っている。引き続き食糧が最も必要とされている国はソマリアである。一方、現金で必要な予算に対して、実際に寄付の支払いや誓約のあった金額は、4373万0458ドルである。UNHCRでは、輸送・医療・衛生・給水などの分野で緊急計画の経費を賄うため、さらに1971万9236ドルを確保することが決定的に重要になっている。

現時点で、最も主要な援助対象地域は、ソマリア

とスーダンにある。ソマリアが緊急に食糧を確保する必要に迫られている。東部スーダンでは状況自体はかなり対処可能なものとなってきたが、輸送費・人件費・運営費などいくつかの分野で当初の予想を大幅に上回っていることが判明した。現在、必要な経費を見直しており、今回の緊急アピールには詳細が掲載される。

関係諸国における85年の作物収穫状況ははっきりしない現段階では、今後援助がどの程度必要かは判明しない。しかしながら、その時までは緊急援助を続ける必要があり、また、食糧だけが問題を解決するわけでもない。UNHCRでは、食糧以外の援助を継続するため、1900万ドルの資金が緊急に必要となっている。衛生・保健対策が施されなければ、伝染病発生の危険性は非常に高い。給水も絶対に不可欠であり、物資輸送の経費もどうしても欠かせない。

### 特別緊急援助対象の国別難民数と主な援助品目

#### 食糧

- 穀類 (米・キビ・トウモロコシ)
- 小麦粉
- 豆類
- 植物油
- 全脂粉乳
- 脱脂粉乳
- トウモロコシ・大豆混合粉乳
- 高タンパク質ビスケット
- ナツメヤシの実
- 砂糖
- 塩

#### 食糧以外の品目

- 収容施設 (テント・小屋)
- 給水施設 (給水車・井戸・ポンプ・タンク)
- 保健関係 (医薬品・医療器具等)
- 日用品 (毛布・炊事用具・衣料)
- 輸送・保管費 (車輛・燃料・道路補修)
- 運営経費



\* 国によって多少品目の内容が異なります。

# 東部スーダン——エチオピア難民の移送

## エチオピア難民に対する緊急援助特別計画

### 迫られる難民の移送

1984年を通じて、エチオピア難民が大量に東部スーダンへ流入した。UNHCRは現有の財源から援助を提供してきたが、84年11月当初の推定では新規の流入難民は3万5000人であったのに加え、大量の難民流入が見込まれたため、緊急援助特別計画を新たに策定する必要が生じた。84年12月15日までに、さらに7万5000人が到着し、1985年1月8日には難民総数は17万人に上り、4月4日段階では約31万3000人に達していた。

本年4月末から5月にかけて、新難民の流入ペースが落ちるとともに多数の難民が耕作期を前にエチオピア国内の出身地に帰り始めた。5万5000人の難民が現在までに帰路についている。雨期が始まった6月、7月になるとこの帰国の動きはいったん止まったが、収穫期の11月、12月には再開することが予想される。しかしながら多少ペースが落ちたとはいえ、毎週約4000人の割合で新難民の流入も続いている。さらに少なからざる数の難民がキャンプを自然発生的に離れ、その周辺に住みつき始めている。

8月15日現在、東部スーダンで援助を受けている難民は32万1000人である。さらに相当数の難民が近い将来国境を越えてスーダンに流入してくる可能性がある。こうした事情から、援助対象の難民数は50万人と見積られている。(ただしこの数字は、以前からの定住地に住む13万人の難民も含んでいる)

東部スーダンにある既設のレセプション・センターは急速に過密化しており、特に国境地帯では水不足のため、新たに流入してくる難民を他の地域に分散して収容する一方、さらに難民の一部を国境から離れた地域へ移送する必要に迫られている。8月15日現在、カッサラ州、青ナイル州、紅海州における新難民の所在地と数は、ワドシェリフ(14万人)、ヒラトハクマ(2万8000人)、ワドコウリ(2万9500人)、ウムラコバ(1万2000人)、ワドエルヒレイワ(1万1000人)、ファウ(2万5000人)、ギルバ(2万9500人)であり、以前からの定住地(2万5000人)や南トカル(3万人)にも散在している。

全面的移送計画に従って、この先1、2カ月以内

にワドコウリは収容定員を大幅に縮小するが、必要に応じて今後もレセプション・センターとしての役割を果たすことになっている。ワドシェリフにいる難民はカシュムエルギルバを始めとして、キロ26、カルコラ、ウムガルグルおよびギルバ湖岸の既設の難民定住地に移送されるほか、エルファウに新設される2カ所の定住地にも移される予定である。新しい定住地は目下整備の最中にあるが、最大の問題はいかに給水体制を整備するかである。手始めに、大型ポンプの取り付けと、ギルバ湖から新定住地への給水パイプの敷設が目下進行中である。エルファウ地区では、ドイツ技術援助事業団の手で給水システムの配備を完了している。

### UNHCRと民間援助団体の対応

食糧と水は主要な優先課題である。新規の流入難民と、以前からのUNHCR定住地において昨年凶作にみまわれた13万人の難民に対しては、十分な食糧がいきわたっているが、このため食糧援助を必要とする難民総数は約45万に上っている。

食糧の供給は現段階では十分に間に合っており、基本食糧はすべて、各国からの供出とWFPからの提供によって賄われている。6～9月の雨期に道路の通行が不能となり孤立するおそれのあるキャンプでは、食糧備蓄に努めた。このためUNHCRは70棟のプレハブ倉庫(総容積4万m<sup>3</sup>)を現地に空輸して設置した。食糧倉庫はポートスーダン、ゲダレフにも設置された。

給水がもう一つの重要な課題である。過密化して、難民を収容する場所としては不適當になったレセプション・センターから難民を分散し移送する上で、水資源の確保が鍵となっている。このため、OXFAMおよび米国政府派遣の専門家、スーダン当局が目下作業を進めている。ワドシェリフ地区ではUNICEFが井戸の数をふやし、スウェーデンの特別災害救助隊は井戸掘り用の掘削装置を配備している。また、西ドイツの技術援助事業団とスイスの災害事業団はギルバ湖およびファウ地区へチームを派遣して、給水システムの設置に当たっている。

保健・衛生対策は過去数カ月にわたって最重点課題であった。今年6月以降、21カ所のレセプション・センターや定住地で急性胃腸炎の発生が報告され、4500件中131人の死亡者があった。死亡率は3%以下という低い水準にとどまったが、これはUNHCRが前もって基礎的医薬品の備蓄を行うといった予防的措置をとったことと、医療関係者の適切な対応によるものである。

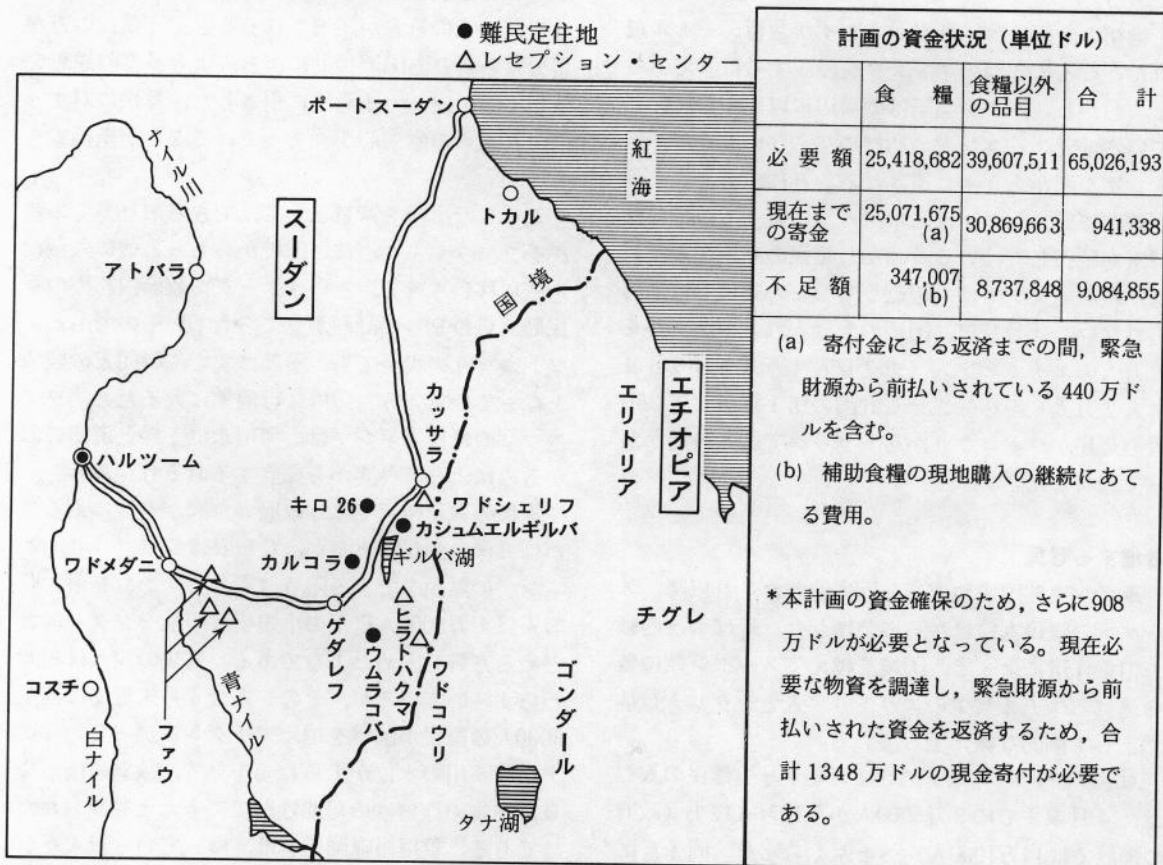
### 増大する援助費

レセプション・センターで活動に従事しているUNHCRと民間団体はともに職員を増員し、スーダン政府内務省の難民局(COR)の陣容も強化された。また緊急事態対策を担当する顧問が任命され、東部スーダンのCORで現在その任務に当たっている。そのうちUNHCRはオフィサー20人、顧問17人を輸送補給や給水、施設建設の専門家として増員し、民間団体では、国境なき医師団(MSF)が16人の医療スタッフを、OXFAMは13人の水道技術者を有している。この緊急援助計画を助けている他の民間団体としては国際救援委員会、スーダン教会

協議会、ラルムバ協会、スイス赤十字社、CARE(米国)、児童救済基金(英国)、YMCA、クリスチャン・アウトリーチ、CONCERN、アメリカ難民委員会が挙げられる。スイス災害事業団がエルシヨワク地区に車両整備施設を設けて、難民を新しい場所や定住地に移送する際、多方面にわたる支援を提供することになる。西ドイツ政府は衛生と道路建設の専門家を派遣している。

予防的措置としてUNHCRはスーダンにコレラ関連の医薬品を含む基礎医薬品を備蓄用に空輸した。

本計画の予算額6502万6193ドルのうち、すでに支出された額(基本食糧を含む)は、85年8月20日現在、5636万1888ドルに上る。援助コストが当初の予想を上回っている予算項目もあるが、これは輸送費・医療援助費・スーダン政府職員行政管理費の分野において顕著である。スーダン政府はこの分野の大幅な予算増額の必要性を表明しているが、UNHCRは現在検討中である。次回の緊急アピールで予算増額を必要とする項目の詳細を報告することができよう。



## 新しいキャンプ地

## ギルバ湖畔

エチオピアからスーダン東部への難民流入の勢いは依然弱まっていない。国境近くの受け入れキャンプの難民の数はすでに収容能力を大幅に超えており、現在数万の難民をカシュムエルギルバ湖東岸近くの新しいキャンプ地に移転させる作業が進められている。

砂漠の灌木地帯の中に出現するカシュムエルギルバの人造湖はあたかも遠くの蜃気楼のように見える。しかし、近寄ってみると、イタリア人がアトバラ川の流れをせきとめて造ったこの人造湖は確かにそこにある。それどころか周囲の荒涼とした光景とは違って変わり、湖畔には山羊とロバの群れが満足げに草をはむ緑の牧草地が開けている。それは荒廃の縁にあって生気をよみがえらせてくれる新世界である。

水が生命と希望の象徴であるこの地方では、ギルバ湖畔は、難民キャンプの設置にうってつけの場所である。

当初の計画では、湖畔からわずか数百メートル離れたところに3つのキャンプを設置するはずであった。しかしスーダン当局は湖周辺に以前から居住している地元スーダン人の妨げにならないように、キャンプを湖から5キロ遠ざけることに決めた。

確かに新キャンプは給水パイプによって豊富な飲料水を確保してはいる。しかし難民の立場からすれば、新キャンプでは水辺近くでの安心感にはもはや得られない。4月17日、国境の受け入れキャンプから6万人のエチオピア人（チグレ人4万人とエリトリア人2万人）を移転させる計画の第1陣として250人の難民がワドコウリからトラックで約8時間かけて到着した。

## 激増する難民

筆者が東部国境地方を前回に訪れた1月以降、スーダンの難民人口はさらに急増した。干ばつと内戦の相乗作用によって、国境を越えてスーダン領に難を逃れるエチオピアのエリトリア人とチグレ人は依然として劇的な数に上っている。

ワドシェリフ・キャンプではエリトリア難民の人口は、4月末までに3万5000人から10万人以上（政府の推計では14万1000人）へとふくらんだ。同4月に

南トカルのガダムゲフリエド・キャンプ



4万人であったワドコウリの難民数は、現在ではほぼ6万人に達している（移転の開始前には最高9万人に達していた）。

スーダン政府にとって、こうした膨大な難民人口はいくつかの理由からすでに耐えがたいものとなっている。第1には人口の過密化である。第2は、難民受け入れの負担を東部にだけ集中させないで他の地方にも分散するべきだという点である。さらに第3に、地元の資源が圧迫されることと、「難民の方が自分たちよりも国際援助によってより多くの恩恵を受けている」という不満感に根ざした、難民に対するスーダン人の敵対心が強まっていることが指摘できる。

こうした事情を背景として、できる限り多くの難民をファウヤギルバなど国境からもっと奥に入った地方に移動させる、というスーダン政府内務省の難民局（COR）の計画が立てられているのである。ワドコウリの場合でも、事態はすでに時間との競争となっている。5月以降には雨期に入るため、ワドコウリの難民キャンプは、河川水位上昇と道路のぬかるみによって外界から孤立するおそれがある。

本稿の執筆時点では、政府の意図がどこにあるのかははっきりしなかったが、CORはワドコウリ・キャンプの難民をできる限り減らして、これを最大収容人員1万5000人以下の小規模な中継センターにとどめる方針を固めたようである。難民の流入は相変わらず続いているが、その一方で4月末近くに推定5000人の難民が国境を越えてチグレに戻っていった。アトバラ川の水位が上ったのを見て、故郷に雨が降り、作物の作付けの可能性がでてきたと判断したためである。救援組織関係者は、戻っていった人々が

秋の収穫まで食いつなぐだけの十分な食料がないのではないかと心配しているが、UNHCRでは難民を強制的に滞在させてはならないし、残留を希望する人々だけをギルバに移動させる意向であると強調している。

### 難民キャンプでの問題点

難民キャンプに共通するいくつかの問題を解決する必要もある。これまでのところ、たびたびの要請にもかかわらず、殺菌用の塩素がまだ届いていない。一部の救援機関関係者によると、湖の水は「不潔」で、病気の主要な発生源の1つだという。「こうした基本的な事柄が無視されているかぎり、難民を助けるために医療班を送りこんでも無意味だ」と、あるヨーロッパの医療担当者は指摘する。同様にワドコウリでは、石けんの使用は貴重な水の浪費につながるだけとの理由でCORは石けん支給の要請を蹴っていたが、ここではワドコウリと違って、洗浄・洗濯用品は健康維持に欠かせない自衛手段の1つとして支給されるべきだ、と外国人救援関係者は主張している。

ギルバに限らず他のキャンプでも無視されているもう1つの問題は、物資の円滑な供給のために道路改修を速に行う必要性である。未舗装の一車線道

路に輸送を全面的に依存している救援機関関係者たちは、すぐさまジャリを入れ、ローラーをかけ、最もひどい箇所にはポータブル式の走行路を敷設するといった措置をとらないかぎり、大型トラックが砂だまりにはまったり雨期に泥にはまって動けなくなると警告する。「我々の仕事は何としてでもこれらのキャンプに物資を送り届けることだ。我々が無駄に費やす1日1日は非常に貴重なのだ」。

野外の難民収容施設（ソマリア、パキスタン他）を悩ませている最も深刻な環境破壊は樹木の伐採であることは言うまでもない。ギルバ湖のキャンプも例外ではない。しかし十分な配慮と行動をもってすれば、対策を講じることは不可能ではない。

現在のところギルバ・キャンプは半乾燥の灌木地帯に囲まれている。この灌木は多くの部外者の目にはとるに足らないと見えるかもしれないが、砂漠のより一層の進行を食い止めるためには、生態学的に決定的な意味を持っているのである。間もなくギルバでは6万人の難民が暮らすことになるが、もしもこの人々に対して木炭などの燃料の外部からの供給がなされないならば、灌木は難民の調理用燃料としてたちまちのうちに根こそぎにされてしまうだろう。

そうになったら、このキャンプ地にも、不幸な砂嵐が吹き荒れることになる。

## 西部スーダン——チャド難民の流入

### チャド難民に対する緊急援助特別計画

#### 被災民キャンプからレセプション・センターへ

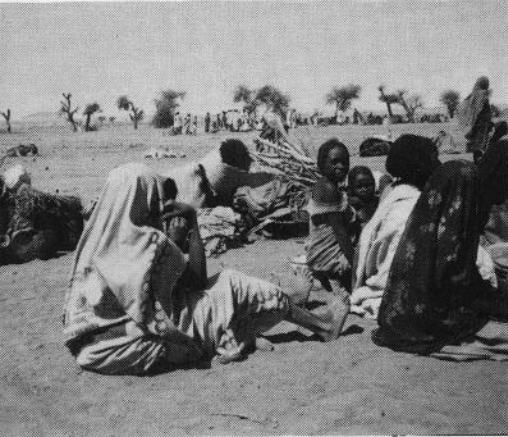
本計画の目的は、約6万人のチャド難民に救済援助を提供することである。新たな大量の難民流入の報告はなされていないが、救援センターに集まってくるチャド難民はかなりの数に上っており、6万人という援助対象見積り数の増加修正も考えられる。

先頃行われたスーダン政府とUNHCRの合同調査団の報告によれば、同国政府は西部スーダンのダルフル地区に約12万人のチャド難民がいることを確認した。ただしこの数字には、既設のキャンプで援助を既に受けているチャド難民6万人も含まれている。同地区の状況が、特に一般的な食糧事情の逼迫に伴って悪化すれば、より多くのチャド難民が既設キャンプに救いを求めてくる可能性が高い。

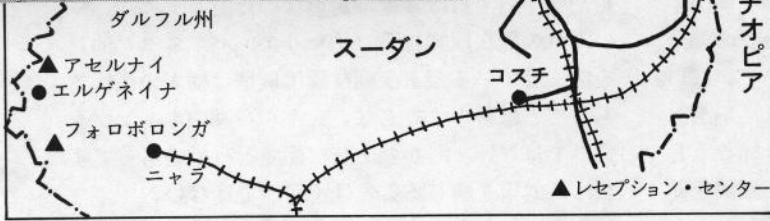
ここ数週間間に、スーダン人の被災民キャンプに集まったチャド難民をUNHCRのレセプション・センターに移動させるため数多くの移送が行われた。こうした結果、UNHCRの援助の焦点は目下、エルゲネイナ近くのアセルナイ地区、北部ダルフル州の南部国境地帯にあるアンジコチ地区、そしてウムバラ地区に移ってきている。

#### 食糧の確保と給水

輸送中の食糧備蓄は6万人という計画上の見積り数を今年末まで賄うに足りるだけの量が確保されているが、難民人口が増えれば当然見直しを行う必要がある。当面の主要問題は、過重な負担のもとで、複雑な長距離補給ルートを経ている西部スーダン



アセルナイのチャド難民



計画の資金状況 (単位ドル)			
	食糧	食糧以外の品目	合計
必要額	3,080,551	4,589,223	7,669,774
現在までの寄金	2,977,497	3,529,280	6,506,777
不足額	103,054	1,059,943	1,162,997

\* 本計画の資金確保のため、さらに、食糧で10万ドル相当分と現金で106万ドルの寄付が必要となっている。

への食糧の補給を確保するかという点にある。食糧とその他の救援物資の輸送経費が大幅に増加してきており、UNHCR予算の中でも、270万ドルの追加支出が見込まれている。WFP 供与の穀物4320トン西部スーダンへ運ぶ輸送コストもこの中に含まれている。降雨や地滑りによる鉄道の破損や道路の寸断により、西部スーダンへの救援物資補給は危機的な様相を呈している。このためUNHCRは他の国連機関や民間団体から全面的な協力を得て、緊急物資を輸送するために、西部地域に通ずる確かな道路の確保に努めている。

オランダ政府派遣の水問題の専門家グループが、現在全計画予定地に給水を確保すべく活動に当たっている。さらにUNHCRは車両や無線通信設備を購入して、この専門家グループがフル稼働できるように支援している。

アンジコチ地区の給水は順調にっており、ACROSSという教会の連合団体がUNHCRから委託を受けて1万6000人のチャド難民を援護している。2万6600人のチャド難民(スーダン人被災民を含む)を抱えるアセルナイ地区では、地表に十分な水量がなく、また深井戸の掘削もうまくいかないために給水事情は芳しくない。このため、目下OXFAMが給水設備の取り付け作業にかかっている。新設のウムバラ地区(2万2000人)の給水は順調である。

チャド難民の健康状態は、困難で不規則な食糧配給事情にもかかわらず良好である。全児童と栄養失調児を対象とした補助給食も実施されている。また、抗コレラ薬品を含め医薬品は現在のところ足りているが、輸送事情が許す限り備蓄をふやす必要がある。

ウムバラ地区へのチャド難民の移送が完了すれば、

UNHCRの西部スーダンにおける活動の焦点は、エルゲネイナ地区からニャラ地区へ移る予定である。ニャラは、スーダン西部の鉄道主要駅であり、物資補給基地であるとともに、この地方の主な政府機関が集まっている中心地でもある。従ってUNHCRとこの地方の政府当局との間の連絡調整も円滑に運ばれるものと期待される。しかしながら、UNHCRはエルゲネイナ地区にオフィサー1人を支援要員とともに残留させて、同地区で生じる問題に対応させることにしている。

本計画の予算額766万7774ドルのうち、すでに支出された額は、85年8月20日現在、602万0104ドルに上っている。

## 『REFUGEES』誌85年4月号より

### 西部スーダンの飢饉

#### スーダンに逃れるチャド難民

スーダン政府によると、12万人のチャド人に混じって、干ばつで追われたスーダン人の現地住民が救援を求めているという。

アセルナイ。1985年2月9日

キャンプ入口の地面や砂地に約1000人の人々が座りこんでいる。大半は女性、子ども、老人で、わずかな持ち物に囲まれて座っている。男たちは仕事を求めて町に行ってしまった。

難民は干ばつや国内紛争のためにチャドから逃れてきた人たちだ。何日も何日も歩いて国境を越えてきたばかりの者。かなり以前にスーダンに入り、食物を求めて流浪してきた難民。長い旅の間、人間が

通常は食べない種子や植物しか口にすることができなかった者たちもいる。スーダンの西のはずれに位置するここダルフール州には、食べる物が全く残されていないといっても過言ではない。現地で生産されたモロコシは最後の貯えも底をつき、家畜類も徐々にいなくなっている。エルゲネイナの年老いた住民は「こんなに多くのハゲタカが砂漠の上空を飛んでいくのを見て見たことがない」と心配そうに語っている。

アセルナイはエルゲネイナから約20キロほど離れている。このキャンプは1万人の難民を対象に85年1月8日に設営されたが、2月8日には収容数が既に2万5000人に達していた。翌日には、それが2万6000人に増えていた。多分そのうち半分がチャドからの難民であろう。しかし簡単には判別できない。両国の国境周辺の住民は同じ人種で、言葉や宗教も同じであり、遊牧のためにいつも国境を行き来していた。もっともそれができたのは、干ばつ以前のことであるが。現在スーダン人は援助を期待してチャド人として通すことがよくある。一方、チャド人は送り返されることを恐れて、スーダン人と思われようとする。

### 心配な食糧事情

2月6日には極度の栄養不良（約150人）を対象に補助給食センターが開設された。ここでは赤十字・赤新月社連盟の看護婦2人が、児童への特別食を作り、母親に栄養に関する基礎知識を教えようとしている。母親にはビタミン入り乳製品が配られている。その他健康・医療に関連したことは全てイスラム教アフリカ救済機関（IARA）の医療班が担当しており、UNHCRは薬品や医療品を提供している。

しかし、救援担当者が最も憂慮しているのは難民の健康状態ではない。主要な問題は食糧である。エルゲネイナに駐在するスーダン政府内務省難民局副長官であるモーメド・アーメド・イマム氏は警告を発している。

「緊急に食糧が必要だ。小麦（粉）は不可欠で、食用油、乾燥豆類、ミルク、それに缶詰の肉や魚もすぐ必要となる。肉の補給が足りない。どれだけの家畜が残っているかお分かりですか」

この地域に新たな食糧を運びこむのは難問である。UNHCRは民間団体や資金拠出国政府の助けを借りてこの難問題に当たっている。スーダン東部でも

輸送・補給問題の解決は難しいが西部では問題はさらに大きくなる。

スーダンの唯一の港であるポートスーダンとエルゲネイナの間は一直線ではば2000キロの距離がある。物資の輸送は、通常次のような手順でなされる。まずトラックでポートスーダンからコスチに運ぶ。その後汽車でニヤラに、ニヤラからエルゲネイナまでは道路輸送となる。アセルナイ難民キャンプには軽い荷を積んだ四輪駆動車だけがたどり着ける。

空輸も一つの解決法である。フランス政府は2月に、UNHCRに対して1週間、トランスアルC160軍用機を貸与することに決めた。2月13日までに、約50トンの小麦粉がポートスーダンからエルゲネイナまで、1便につき7トンずつ輸送された。フランスの乗組員が現地に着いた時ショックを受けたのは、ダルフール州の飢饉の状況それ自体というよりもむしろ、自分たちの運んでくる小麦粉1便分がキャンプ住民の1日分でしかないという事実であった。乗組員らは2日後半、あと数回だけ輸送することになっていた。

米国のスーダン政府に対する寄付金で、90トンのモロコシを現地市場で買い付けることができた。この主食を補うものとしてUNHCRは700トンの食糧（豆類、油、粉乳）を送った。これで難民の90日分の食糧が確保されたことになる。物資は2月初めポートスーダンに着き、2月26日にキャンプに届けられた。この90日分以降の食糧は世界食糧計画（WFP）が引き継ぐことになっている。さらにサウジアラビア赤新月社からもいくらかの援助が予定されている。

しかし救援隊はもう一つの問題を憂慮し始めている。それは水不足である。キャンプは小川のすぐ側にあるが、間もなく飲料水が不足する。大量の人と家畜が殺到したために、川はあっという間に汚染されてしまった。オランダからの専門家チームが今年初めに行った調査によって、飲料水供給に可能な地下水脈があることが判った。現在、現地では住民と難民用に20本の試掘孔と井戸が掘られている。UNHCRは井戸の操作に必要な装置の一部を購入し

た。スーダンの東部においても、西部においても、その日その日なすべき仕事は、いかに生き延びるかということである。

# ソマリア——急増する新流入難民

## エチオピア難民に対する緊急援助特別計画

新流入難民（ソマリア政府の推定で15万人）に対して、3カ所の一時収容キャンプ（同国北西部のビヒン、ダルビホレ、南部のマグドー）と、4カ所のレセプション・センター（北西部のガネット〈2カ所〉、ボラマ、ツグワジャレ）が指定され、救援物資がつぎつぎに到着し配給されている。UNHCRは、毛布12万枚、テント2万2000帳、防水布1万枚のほか、ランプ、調理器具、砂糖、石鹼、衛生セットなどを配給している。薬品、医療器具、燃料、給水設備も緊急に調達中である。

指定されたキャンプ地のうち、ビヒン（新流入難民3万6000人）だけが完全に機能している。ハルゲイサから250キロ離れたダルビホレに一時収容キャンプが設置され、ツグワジャレ、ボラマの両レセプション・センターから、第一陣の難民9000人が収容された。またヒラン地区の新しいキャンプには、ゲドー地方の新難民を受け入れることになっているが、それまでは、ゲドー地方のマグドーキャンプにいる。ここの条件は適当とはいえない。ガネットのレセプション・センターには、現在6万4000人（推定）の新難民が収容されている。

次にボラマのレセプション・センターは閉鎖され、収容されていた難民はダルビホレのキャンプに移された。またツグワジャレのセンターの新難民も大半がダルビホレに移されたが、まだ約2000人が残されている。

ガネット・レセプション・センターの難民は、できるだけはやく、ダルビホレ付近のキャンプかもう一カ所の施設（場所未定）に移される予定である。これらのキャンプとヒラン地区のキャンプを設営するために、UNHCRは、北西部のベルベラへ、テント5000帳、南部のキャンプに同4000帳を供給している。さらにガネット・センターの新難民6万4000人を新しい収容キャンプへ、またゲドー地方の3万9000人をヒラン地区にそれぞれ移送するための燃料も供給している。さらに、ジャララクシの収容センターには給水システムが作られ、現在順調に稼働している。

1985年7月末付で作成の状況報告のなかで、北西部地域に関する部分の要旨は次の通りである。

### レセプション・センター

**ガネットa** コレラ治療病院の患者収容能力は1000人、給水所とタンク5カ所、給水センター4カ所、衣服の石灰消毒所・地中投棄処分センター、共同墓地が各1カ所、コレラ隔離病棟は患者2000人を収容可能であり、台所、便所、水道設備、第二共同墓地を備えている。

**ガネットb** コレラ隔離病棟の患者収容能力は2000人だが、キャンプ自体は6000人を収容できる。1500の便所が設けられ、保健相談所27カ所、給食センター8カ所、下水施設、ゴミ処理用の穴12カ所、保健チェックセンター2棟（合計4000人を検査可能）を備えている。

**ツグワジャレ** 2000人を収容可能で、フェンスがめぐらされており、給水所、便所、給食センター、外来患者診療所、食糧倉庫などがある。

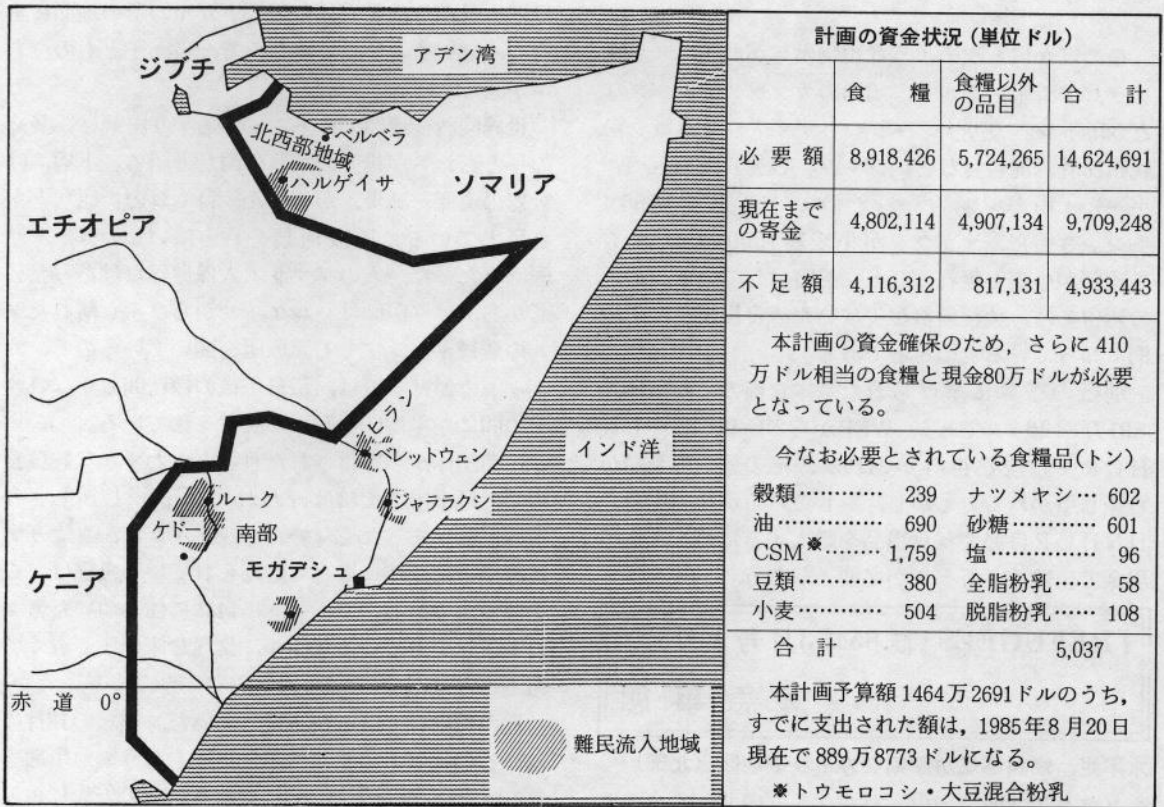
**ボラマ** 患者100人を収容可能なコレラ隔離病棟と若干の施設があり、フェンスが張られている。1000人を収容するセンター自体の施設は1985年6月に放棄された。

### 一時収容キャンプ

**ビヒン** 水源をフェンスでかこみ、塩素消毒のできる給水施設があり、310人の肝炎患者を治療する仮設病院、排せつ物処理施設がある。コレラ隔離病



JVC農場の周辺にも新難民が流入してきた



棟は患者収容可能数300人。キャンプの難民数は合計3万6523人にのぼる。

**ダルビホレ** 給水システムは井戸5カ所と給水タンク、給水所からなる。給食センター2カ所を設置し、2万人を収容する予定。フェンスと便所を設置する計画である。患者300人用に建てられたコレラ隔離病棟は今でも使用されている。キャンプの収容数は7月末現在で7343人である。

**以前からのキャンプ** コレラの伝染を防ぐため給水施設が作られ、タンク2台、ポンプ、配管を備えて必要給水量の20パーセントをまかなっている。

援助計画はUNHCRおよび民間団体と協力しながら、ソマリア政府の関係機関が実施に当たっている。国家難民委員会(NRC)が一時収容キャンプの準備と監督を行っており、難民給水部とOXFAMが給水システムを担当している。一方、難民保健部によって各キャンプに配置されたコミュニティ・ワーカー、助産婦、看護婦、準医療スタッフが保健衛生計画を担当し、予防接種、栄養状態監視、伝染病監視、給食センター、衛生管理に当たっている。

様々な民間団体が北西部地域で政府機関を援助しており、そのなかには、フィンランド医療団、キリ

スト教難民援助、ドイツ緊急医師団、UNICEF、赤十字社連盟、国境なき医師団、CARE、WFPなどがあげられる。

現物での寄付や援助活動の協力は食糧、保健、生活用品の部門全般にわたって、以下のような団体から提供されている。UNICEF、児童救済基金(英国)、回教徒世界連盟、ERDGS、カリタス、イスラム教アラブ救援機関。また、日本国際ボランティアセンター(JVC)が診療所と補助給食センターの建設を担当している。

食糧物資は依然として最大の関心事である。西ドイツから提供を受けた寄付は、現金では、モロコシ3640トン、食用油139トンの購入費、現物では、小麦粉565トン、脱脂粉乳200トン、食用油122トン、ヒラマメ500トン、砂糖300トンであった。モロコシと食用油139トンはすでにキャンプに届いて配給されている。小麦粉は8月中に到着する予定。イタリア政府からはパスタ124トンの購入費の現金寄付があった。EECは現物で、小麦3000トン、トウモロコシ粉1000トン、小麦粉1750トン、脱脂粉乳450トン、植物油500トンを提供している。以上の物資は7月中にソマリアに到着している。日本からはマーガリン59.4トンの現物供与があり7月に届いてい

る。

このほかにも次のような現物供与がある。サウジアラビア：米、ミルク、鶏肉のカンヅメ、チーズなど355トン。カリタス・ソマリア：トウモロコシ粉、脱脂粉乳、混合食など約60トン。OXFAM（ベルギー）：粉ミルク、バターオイル、小麦粉、砂糖50.4トン。さらに、オランダが小麦粉1500トン、スイス政府が小麦と豆乳200トンを寄付している。最近の報告では、食糧備蓄が少ないため食糧配給は不規則になっているとのことである。

別紙の予算に挙げられた基本食糧の必要額は、891万8426ドルである。WFPからの新規供給やUNHCRへの現物供与があれば、その分この金額から差し引かれる。しかし、もしこれがない場合、UNHCRは必要な食糧品を購入するため、さらに現金で合計410万ドルが必要となろう。

## 『REFUGEES』誌85年3月号より

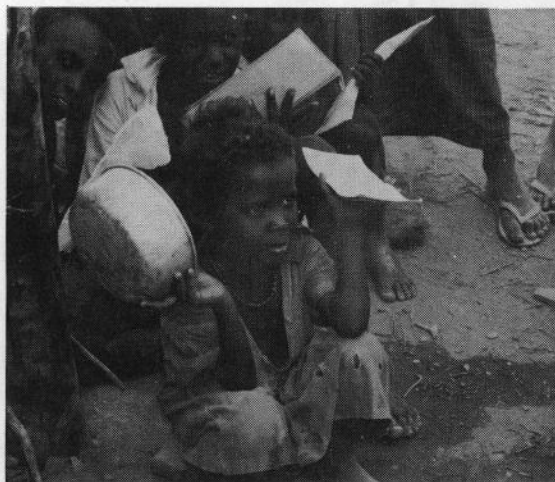
### 緊急事態

#### 水不足、燃料不足が深刻なガネット地区（北部）

ソマリア北西部の街、ハルゲイサの北、ガネットに自然発生的にできた難民キャンプは、埃っぽいモヤにおおわれていた。人の排泄物と腐ったゴミの悪臭が、午後の熱気のなか、あたり一面にたちこめている。衛生設備はまったくない。

筆者が訪れた1月末には新難民は1万5000人と推定されたが、現在1日100人以上の増加が続いている。

ガネットにはドーム型をした伝統的な住居「アカル」が密集している。この地のアカルは麻袋や段ボールで急造されていた。子どもたちは、可哀そうな



マグドロー・キャンプでの補助給食（JVC）

ほどやせ細り、老人は衰弱しアカルの蔭の地面に坐りこんでいる。いたるところで、咳と子どもの泣き声が聞こえる。

世界回教徒連盟のモーシェド・アリ医師は、多くの子どもたちが極度の栄養失調だと語る。下痢、呼吸器の炎症、肺炎、かいせん、目や耳の炎症なども蔓延している。医療活動を行っていたのは、アリ医師とたった一人のソマリア人保健婦だけだった。しかも、アリ医師はハルゲイサから9キロ離れたダムスの難民キャンプでも診療所を開いているので、ガネットで働けるのは、毎日午後の数時間しかない。その間に、平均60～70人の患者を診ている。

民間団体から寄付された食糧と、わずかな貯蔵食糧で、最小限の配給は行われている。しかし、今後の保証はまったくない。ハルゲイサに、ソマリア政府や民間団体によって貯えられている食糧は、ごくわずかである。ガネットに自然に住みついた人々のキャンプしている一画が、食糧倉庫のすぐ近くであることは、なにか暗示的だ。

北西部地域では水が不足し高価だ。昨年12月には、この地域の当局が水不足にともなう緊急事態宣言を、行おうとしたほどである。その矢先に恵みの雨が降った。

ガネットの難民のなかに、ロバの荷車と200リットルのドラムカンを持った老人がおり、多くの人が毎日の飲料水をもらっている。その老人は水を求めて、1日25回もハルゲイサまで往復している。

ここでは、ガソリン不足も深刻で、救援団体の多くが、食糧や水を供給する車両さえ使えない。トラックや給水車用燃料は、ぎりぎり定期配給をまかなう量しかない。

ガネットの状況はひどく、自然発生的にキャンプしている難民も、無期限にはとどまれないことは明らかである。下水など衛生設備の不備のため、ガネットばかりでなく、ハルゲイサの街全体が深刻な保健上の問題に見舞われる恐れがある。

#### 建設が進む新しいキャンプ

北西部地域に新たに到着した3万5000人あまりの難民は、1984年9月に新設された収容キャンプに移送された。このキャンプは、ハルゲイサの北東220キロ、ベルベラの南60キロのところにある。当初は、移住者の大半がガネットからの難民だったが、その後、他地域からの難民と入れ替わっている。

難民の移送のため、昨年9月には5日間、政府

## UNHCR による調理用品と農具の配給



や軍隊、それに民間の利用可能な車両が動員された。車はトラックとトレーラー約120台でUNHCRは燃料を供給した。政府や民間団体の職員は、新たなグループが到着するために、難民が落ちつくよう、日夜を徹して働いている。

新キャンプの大きさは、縦6キロ、横500メートルあまり。そのなかに、約1万1000戸のアカルがある。このアカルは、ガネットのものよりはるかにしっかりした造りで、多くにはUNHCRが供給した、防水シートの屋根がついている。キャンプは32の地区に分けられ、そのそれぞれには、選出された長老委員会がある。

### 幼児死亡率が月3パーセント（中央部）

ソマリア中央部、ビヒンのキャンプは、設立以来改善されてきている。1984年10月には、月5～6パーセントであった幼児の死亡率も、現在では3パーセント程度に落ちついている。1月には108人が死亡したが、その大半は下痢が原因である。

ソマリア政府難民保健部（RHU）のハルゲイサ代表、フセイン・サマタール医師が、ビヒンのキャンプの医療サービスの責任者である。彼は「現在、伝染性肝炎が発生している」と述べている。1月31日現在、肝炎の発生件数は310件であった。

さらに結核が90件、ハンセン氏病と診断されたものが15件あった。このほかにも、発病初期で発見されていない症例もあると思われる。また髄膜炎で5人の患者が死亡している。

サマタール医師は職員とともに、3000人の栄養失調児を対象に、特別給食センターを作った。そこでの集中給食プログラムでは、重症児は1日6回、

それ以外の児童には1日2回食事を与えている。給食内容は、脱脂粉乳・穀類・油・砂糖で作った高カロリーの粥や、高蛋白のビスケット、ナツメヤシなどである。妊婦や授乳中の女性も補助給食を受けている。

### 汚染される水、不足する衛生知識

医療班が寝ているテントのそばの立ち木には、20本あまりの哺乳ビンが束になってブラ下げられている。サマタール医師によれば、このビンは「残酷な記念品」で、一本一本が幼児の死に間接的に関係しているという。

哺乳ビンは、病気の子どもを連れてきた母親から取り上げて、そのまま木につるされた。ほとんどのビンには紅茶か汚ない水が入っている。ミルクが入っているものは一本もない。母親たちがこのビンをどこから手に入れたか分からないが、ソマリア政府はプラスチック製の哺乳ビンの輸入を禁止しようとしていると、同医師は話している。

現在、RHUはビヒンで106人のコミュニティ・ヘルス・ワーカーと60人の伝統的な助産婦を養成中である。訓練を受けているのは、キャンプに住んでいる人たちである。飲料水を媒介とする病気がビヒンの住民の健康にとって最大の脅威である。

最近行われた調査では、衛生設備の不備のために、キャンプから13キロも離れた場所まで、水の汚染が広がっているという。サンプルの水に含まれた大腸菌の量はソマリアの他の難民キャンプでは5か6であるのに、400と高い。5000カ所に便所を作る計画があるが、そのためのセメントが手に入っていない。

キャンプには4基の大きな水揚げポンプがある。そのうち1基は太陽エネルギー、ほかの3基はディーゼルで、水をくみあげている。くみあげられた水は塩素殺菌をする貯水タンクに貯えられ、きれいな水を供給しているが、難民たちは、今でも水浴する小川の汚い水を飲んでいる。

2月以降のガネットやビヒンへの食糧補給はおぼつかないが、民間団体の非常に貴重な寄付も数件あった。たとえば世界回教徒連盟は400トン以上の食糧を寄贈、その大半がビヒンに、残りはガネットに配給された。そのなかには、難民が今まで食べたことがない鶏肉のカンヅメやパックにつめられたチーズもあった。難民の大半は回教徒であるから、食糧を配布する職員が、その新奇な物のなかには、豚肉は入っていない、と保証して回らねばならなかった。

# エチオピア——帰国民の問題

## ハラルゲ地方の緊急援助特別計画

本計画の目的は、エチオピアのハラルゲ地域における帰国民（推定30万人以上）の中で救援を必要とする人々に緊急援助を提供することである。援助計画はカナダ世界大学事業団（WUSC）が実施に当たっており、WUSCはディレダワとアジスアベバの両方に職員を配置している。UNHCRの援助計画は、エチオピア駐在国連緊急援助活動本部（代表ヤンソン事務総長特別代表）の救援事業に完全に統合されている。また同じディレダワ地域で給食・保健プロジェクトを実施しているCAREやカトリック救済事業団（CRS）、ルーテル世界連盟（WLF）などの民間団体とも各地域レベルで活動の調整を行っている。

援助計画の基本的柱は、食糧の供給・輸送、基礎的保健活動と飲料水の供給である。WUSCは救済物資と緊急医療器具の配給のために配給地点システムを確立し、これまでに入手した食糧については53カ所の配給地点で配給している。

UNHCRの計画は、帰国民が多数登録されているハラルゲ地方の中央部と南部に重点が置かれている。具体的には、デゲボル、ジジガ、ゴデ、ケブリデハル、ケラフォ、ワルデルなどの地点である。これらの地域は中央倉庫のあるディレダワから距離が遠いため（往復1200km以上）、その結果予算に現れているように、UNHCRに寄付された食糧を輸送・配給するためのコストが非常に高くなっている。

### 食糧の配給は今後も不可欠

基礎食糧に関しては、UNHCRとWUSCは、カナダ、EEC、西ドイツから、穀物・食用油・脱脂粉乳・とうもろこし大豆混合粉乳・砂糖（合計約2万3000トン＝推定500万ドル相当）の寄付の申し出を受けている。このうち、本計画の開始以来、1万6180トンがディレダワに到着しており、1万5051トンが前述の配給地点で配給を完了しているかすぐに配給できる状態になっている。食糧は今後も続けて到着することになっている。食糧の配給は、WUSCとエチオピア救済復興委員会（RRC）の6班からなる共同チームが実施しており、WUSCのフ

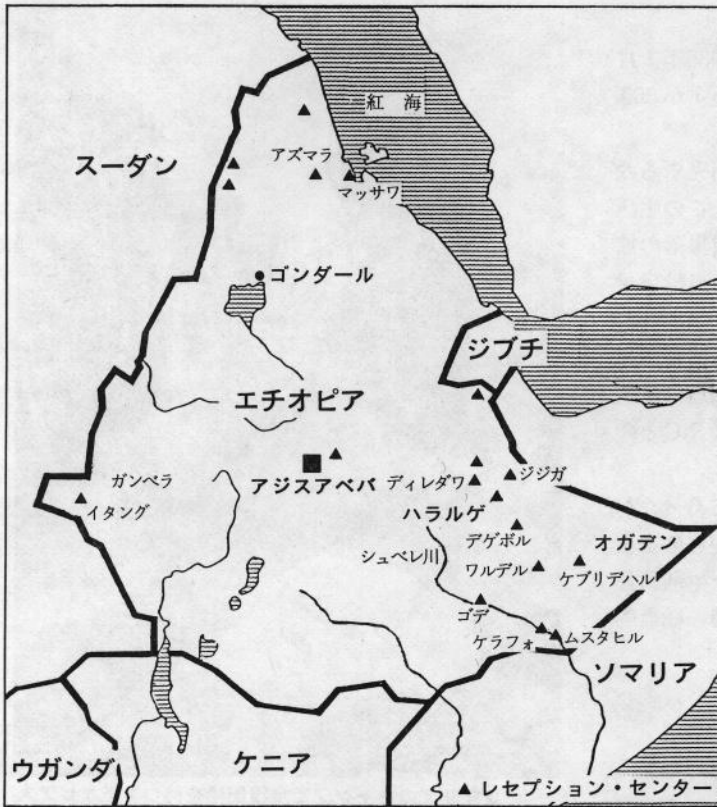
ールド責任者がモニターしている。食糧の配給は今後も不可欠である。また今年5月からオガデン地方ではまったく雨がなく重大な事態となっている。

輸送補給の部門では、各地の配給地点にある倉庫の限られた収容能力を最大限に使っている。WUSCは、7棟のプレハブ倉庫（300トン収容）を、ディレダワ、ジジガ、ケブリデハル、ムスタヒル、ワルデルに運び込んで組み立てた。本計画の予算で調達されたトレーラートラック（22トン積載）15台がフルに稼動しており、これまでの輸送力不足の解消に役立っている。長距離輸送については今後も引き続きトラックを賃借する必要がある。7月には1200トンに上る援助物資が配給された。保健監視チームを配給モニターのためWUSCでは8台の軽自動車を追加調達して現在使用中である。これに加えて、4台の軽自動車が他のUNHCR援助計画から緊急計画として充当されている。UNHCRとWUSCの緊急取り決めにより、ディレダワに自動車整備修理センターが1カ所追加して設置され、WUSCと現地のスタッフが置かれている。

栄養保健分野では、WUSCの医療監視員が業務を引き継いでいる。幼児の大半が栄養失調ないし危険状態にあることが判明し、ゴデ、ケブリデハル、ゲデボルの3カ所で補助給食が現在運営されている。これらの給食センターでは、WUSCのチームが約1400人にのぼる栄養失調児、妊婦、授乳期の母親、衰弱した老人を対象に1日2回給食を実施している。栄養調査が現在、児童救済基金（SCF）から技術上の協力を得て実施されているほか、6台の移動診療車と保健監視チームが活動している。最近、ゴデ＝ケラフォ地域でマラリアと胃腸疾病が発生し、これを抑制するため緊急援助が必要となった。

### 給水体制開発のためのプロジェクト

WUSCの給水部門コーディネーターが、ジジガ、デゲボル、ケブリデハル、ワルデルの4地域で、水供給システムの現状を把握するため最初の現地調査を完了した。WUSCの給水プロジェクトは、エチオピア政府水道建設局による現行の水資源開発計画



計画の資金状況(単位ドル)

	食糧*	食糧以外の品目	合計
必要額	5,000,000	9,077,495	9,077,495
現在までの寄金	5,000,000	3,591,903	3,591,903
不足額	0	5,485,592	5,485,592

\*食糧の供給は UNHCR 特別アピール予算の枠外でまかなわれているため本予算には含まれない。  
本計画の資金確保のため、さらに548万ドルが必要となっている。

と調整しながら進められているが、同プロジェクトの重点は、年間を通じた給水体制の開発に置かれている。WUSCの土木工学コンサルタントが現地調査を終えて、給水プロジェクト実施のための作業プランを作成した。水道・給水施設に必要な設備・機械類の調達が続けられているが、手掘り井戸用の資材は既に運び込まれている。ケブリデハルにおける中央給水作業場については現地調査が行われた。

RRCとWUSC、UNHCRの三者がアジスアベバで開催する月例ミーティングの場を通じて計画実施上の調整と検討が行われている。他方、RRC、WUSC、UNHCRをはじめとして、ハラルゲ地域で活動するすべての国連機関、民間団体の間でも同様のミーティングをディレダワで2週間ごとに開催することになっている。

本計画の予算額 907万7495ドルのうち、すでに支出された額(基本食糧は含まず)は1985年8月20日現在、556万2400ドルに上る。

UNHCRとWUSCでは、ハラルゲ地方の帰国民に対する援助について、緊急救援から限定的な生活再建援助に切り替える方針である。このための計画概要は、1985年4月4日付のUNHCR書信(EA/CCM, 10/84-85)に示されている通りであ

る。気候条件も含め、物理的にも同地方の再建計画にとって恵まれた状態になってきたことから、UNHCRでは各国の政府・民間団体に対して至急新しい計画に資金を寄せてもらうよう要

請している。この計画では、これまでの緊急援助を削減して終局的にはこれを打ち切るとともに、エチオピア帰国民が正常で自立的な生活を再建できるような援助を与えることをめざしている。

### 『REFUGEES』誌85年8月号より

### 生活再建のチャンス

エチオピア北部のウォロ州、チグレ州の飢饉による惨状はすでにマスコミでも広く報道されている。しかし、ハラルゲ地方でもまた約87万5000人が食糧援助を必要としており、この国で第3番目の規模にあたる。このうち303人以上を占めるソマリアとジブチからの帰国民の生活状態は、長期にわたる干ばつのためここ数カ月間に、急激に悪化している。

UNHCRによるこの地方の最初の帰国民援助計画は1982年に始まり、その後84年まで継続された。この期間中にハラルゲ地方における帰国民登録者は31万7000人に達している。しかし干ばつの影響が深刻化した84年の末に及んで、UNHCRは緊急援助の特別アピールを発表せざるをえなくなった。この緊急援助計画は、エチオピア救援復興委員会(RRC)と協力してカナダ世界大学事業団(WUSC)が実

施に当たっている。

同計画の予算は900万ドルであるが、1985年7月初めの時点では、国際社会からの寄金はわずか300万ドル程度にとどまっている。

資金が集まることを前提に緊急計画を補完する大規模な生活再建計画も実施の予定である。この生活再建計画の予算は2300万ドルに上り、農村集落の拡張・新設、飲料水の改善等を通じて農民の自給自足を図ることを目的としている。同時に同計画には、遊牧民の家畜用に飲み場を設置することも盛り込まれている。この場合もWUSCと、農業関連部分についてはルーテル世界連合(LWF)がRRCとの協力のもとに実施に当たる。

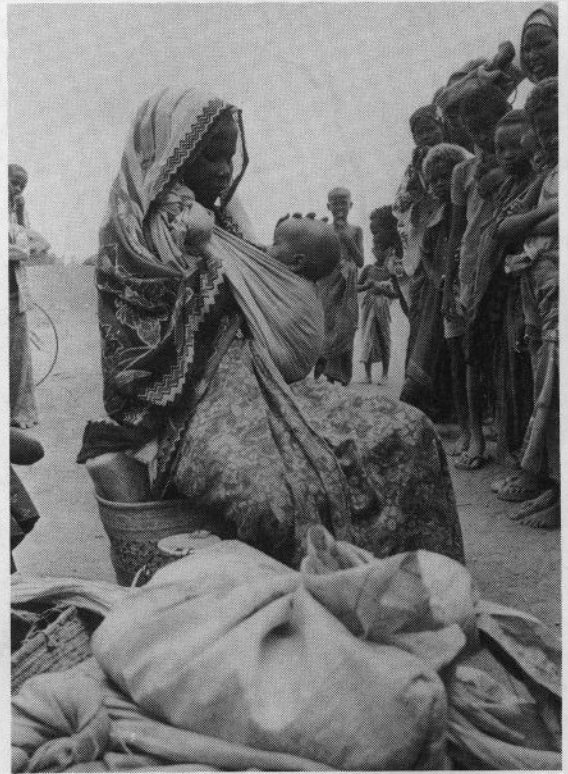
生活再建計画は85年5月に開始の予定であったが、資金不足のため延期となった。7月始め現在の寄金総額は100万ドルに満たない。緊急計画と生活再建計画は、いずれもエチオピアにおける国連の総合的な救援事業と完全に結合されている。

#### 困難な救援物資の輸送

UNHCRのハラルゲ地方救援計画で重点地区とされているのは、ジジガ、ケブリデハル、ゴデ、ワルダル、デボゲル、ケラフォの6地区である。最近筆者は国際ジャーナリストの一団と共にオガデンの奥地にあるデゲボルとケラフォを訪れた。

統計によるとエチオピアは世界の最貧国とみなされるが、デゲボルはこの国の貧困と低開発ぶりを象徴している。WUSCとRRCがデゲボルの婦国民に定期的に食糧供給を行っているが、救援物資の補給は困難を窮めている。エチオピアの道路事情は世界最低であるとUNDPは報告しているが、商業中心地のディレダワから1本の舗装された幹線道路が低地地帯を曲がりくねりながらオガデンを貫いて走っている。食糧輸送のためにトラック部隊が中央補給基地のあるディレダワと、最も奥まった重点地区ケラフォ間の1000キロの距離を往復しなければならない。トラックとその部品も不足しているが、この輸送方式では経費がかさみすぎる欠陥がある。デゲボル地区においてUNHCRが目標として掲げる婦国民数は4万4000人である。食糧はほぼ8週間に1回の割合で17カ所の配給地点で配給されているが、これらの配給地点は町から離れた所に置かれている。

ある配給地点では、238人の栄養不良児に対する特別給食が実施されていた。高カロリーミルク、オートミール、高たんぱくビスケットが1日4回支給



ソマリアのキャンプで食糧配給を待つエチオピア人

されている。妊婦と授乳期の母親にも毎日食糧の特配が行われており、丸太と泥とトタン板で造られた粗末な配給所の前で、女性たちがじっと配給を待っている。

ここの様子は静かで、なにかはつらつとしたところがない。何カ月もの間、毎日のきまりきった給食に慣れっこになってしまっている。まず内戦に苦しみ、次いで住み慣れた土地を離れて難民として大きな精神的打撃を受け、帰国してからは干ばつと飢饉に痛めつけられてきたこれらの人々は、どんな苦難が身にふりかかっても、それを運命として甘んじて受けとめているかのようなのである。しかし、彼らは希望を失ってしまったわけではない。ここの婦国民の多くは牧畜民であるが、自分たちは再び山羊と羊を手に入れてもとの半遊牧生活に戻りたいのだと訴えている。

#### オガデン地方全体で医師は4人

「診療所」には毎日60人から70人の患者が訪れるが、診療所といっても数棟のトタン張りの粗末な小屋をつないだにすぎない。人口約40万人のデゲボル地区には医師は1人もいない。救援活動家たちの話では、オガデン地方全体でも医師はたったの4人し

かないという。この地区では総勢3人の看護婦と5人の保健助手が婦国民の医療に当たっている。診療所には「入院」ベッドが6床あるが、私が訪れたときには、アメーバ性赤痢にかかってひどくやせこけた1歳半ぐらいの子供が1人入院しているだけだった。

診療所には灯油で動く冷蔵庫が1台備わっているが、デゲボルでは灯油が手に入らないため何カ月も使用不能である。この地方の燃料不足を考へて、UNHCRとWUSCでは太陽熱利用の冷蔵庫を用いたワクチンや医薬品の低温貯蔵・運搬システムの確立を計画している。この計画では婦国民の医療のために巡回医療班をいくつか設ける予定である。各班の構成は看護婦、保健助手、運転手兼通訳が1人ずつ。医療班は婦国民の治療に当たるほか、政府が推進している予防接種事業にも携わる予定である。

オガデン地方ではきれいな水を供給することが焦眉の課題である。多くの井戸が内戦の間に爆撃で破壊されてしまったし、村々の多くは河川からかなり離れている。生活再建計画も壊れた井戸の修復と新しい井戸の掘削を掲げているが、オガデン地方では地下200～300メートルも掘らないと水脈に届かないことが多い。技術や知識があまりなくても修理ができるように、簡単な揚水用ポンプが取り入れられることになるだろう。

### 発足した農業定住地事業にも問題

ケラフォではLWFが1984年に1200ヘクタールの灌漑農業定住地事業を発足させた。ケラフォに一步入ってみて、デゲボルとの大きな違いに目を見張る。人々は活気にあふれ、生産に取り組んでいる。事実このプロジェクトはすでにかんがりの成果を上げている。今年のトウモロコシの生育は順調で、うまくいけばヘクタール当たり1500～2000キロの収穫が期待できそうである。広大な畑にすくすくと育ったトウモロコシは感動的であり、ケラフォ地区全体が緑にもえているかのように見える。しかしこの光景の裏側には複雑でむずかしい事情が潜んでいる。今年初め、ケラフォの生命線であるワビ・シェベレ川の水位は極端に低かったが、筆者が訪れる2～3週間前に雨が降った。雨はこの砂漠を2～3日で緑の灌木地帯に変えてしまう。しかし、この変化は長続きせず、大地はほとんど一夜にして元の干からびた褐色の状態に戻ってしまう。最近降った雨は、川を氾濫させ、作物に多少の被害をもたらしたほか、他

の重点地区につながる道路を切断してしまった。また、時期によっては河川の塩分が異常に高まり、作物用の灌漑を制限しなければならなくなる。

新たに打ち出された生活再建計画では、地形学的・水質学的調査をもとに、不安定な給水条件改善への取り組みがなされることになっている。現在ケラフォの灌漑事業で恩恵を受けている婦国民は6500人であるが、生活再建計画には、ケラフォ定住地を2000ヘクタール拡張し、婦国民の受け入れ数を1万人に増やす構想が盛り込まれている。

救援活動はそれに続いて直ちに生活再建の手だてが講じられなければ、結局は無意味になってしまうのではないかといわれている。大規模な社会基盤の整備と農業開発が行われなければ、オガデン地方の31万7000人の婦国民の大半にとって、自給自足の実現は不可能である。そうなると、彼らは自国で国際援助を頼りに生き続けていくか、悪くすると再び隣接諸国の難民キャンプで援助を受けることになりかねない。

1984年7月にエチオピア政府がICARA II（第2回アフリカ難民援助国際会議）に提出したいいくつかのプロジェクトも、多数の婦国民を抱えるハラレゲ地方の水道、保健、交通・通信、農業関連施設の広範な改善をうたっている。これらのICARAのプロジェクトは、現行のUNHCRの救援活動や、生活再建事業計画との重複を避けて実施される予定であり、婦国民だけでなく他の住民の多くにも恩恵をもたらすはずである。しかしこれらのプロジェクトに対して、これまでのところ寄金の集まり具合は非常に低調である。

### 予想される食糧不足

国連エチオピア緊急援助活動本部は、干ばつによって広がった飢餓に対処するために設立された暫定的な機関である。救援面だけを担当しているが、UNDP、UNHCRとも密接に協力して、被災民に対する緊急援助と中・長期の開発計画を連結させるとともに、深刻で破滅的な局面にあつて、計画が重複しないように努めている。同機関の緊急計画の支出額は、昨年12月から現在までで7億ドル。気候が最良の状態だと仮定しても、現在の危機が終わるまでには10億ドルに達する見込み。来年は穀物を中心に約60万トンの食糧が不足する見通しである。

クルト・ヤンソン代表（国連事務次長補）

# 中央アフリカ共和国——チャド難民対策

## チャド難民に対する緊急援助特別計画

本計画の目的は、流入したチャド難民（現在推定5万人）に対して、至急援助を与えることである。具体的には、国境地帯から離れた土地に安全な定住地を準備し、その施設を整えるとともに、難民をこの新しい定住地に移送する費用を負担することである。

食糧については、現地調達が行われ、西ドイツが提供した5986トンの食糧（175万2205ドル相当）によって今年末までに必要な基本食糧は確保されている。輸送・配給に関する問題点は取り除かれ、ノルウェー政府が寄付した倉庫（12万4294ドル相当）と賃借倉庫の使用によって、食糧の運搬・配給は現在では組織的に実施されている。1カ月当たり15キロの完全配給が行われているが、若干のタンパク質欠乏が続いている。

輸送補給体制の分野では、11台のトラック（7～11トン積載）と12台の軽自動車を使用されており、難民の移送と食糧・救援物資などの資材の輸送に当てられている。難民を国境地帯から移送したり、配給地点に食糧を運ぶために、これ以外にも車両を現地で賃借する必要がある。

保健部門は、国境地帯と新定住地ともに「国境なき医師団(MSF)」が担当しており、緊急医療セット（4万人に対して6カ月以上にわたり十分な基礎的緊急医薬品）がUNHCRと西ドイツによって供給された。MSFが実施する規則的な食糧配給と卓越した医療管理・監督によって栄養失調の発生が減

少した。難民の健康状態は良好であるが、新たに到着した難民の中には栄養失調の者が多少みられる。ファとボウボウのキャンプでそれぞれ診療所が開設された。

「進歩をめざすボランティア・フランス協会(AFPVP)」が、国境地帯と新定住地の両方で食糧の配給を担当しており、また、難民を新定住地に移送して定住させる作業にも当たっている。

新定住地は、ファ、ボウボウ、ダヤ、ボヤの4カ所であり、キャンプ設置の基礎はすでに出来上がっている。組織的な難民の集団移送は3月18日に開始され、5月と6月を通じて続けられ、現在1万2600人の難民が新定住地に移り住んでいる。定住地の整地作業も完了し、難民自身もかなり手伝って23本の井戸が掘られた。そのうち幾つかの井戸が枯渇してしまったため、水を補給する暫定措置が講じられた。現地の小屋を立てる材料（ワラなど）が不足し、一時的対策として難民に家族用テントを配給する必要があった。

当計画の実施に当たって、UNHCRは政府および地方当局、UNICEF、FAO、UNDPと緊密な協力関係を保っている。

本計画の予算額514万6020ドルのうち、すでに支出された額は1985年8月20日現在、410万ドルとなっている。



計画の資金状況(単位ドル)			
	食糧	食糧以外の品目	合計
必要額	882,820	4,263,200	5,146,020
現在までの寄金	501,582	772,478	1,274,060
不足額	381,238*	3,490,722	3,871,960

\* 補助食糧の現地購入の継続にあてる。  
本計画の資金確保のため、さらに387万ドルの寄付が必要となっている。

# ジブチ——エチオピアの残留難民

## UNHCRの援助対象に対する緊急援助特別計画

本計画の目的は、国内西南部のアスエイラ一時収容キャンプのエチオピア難民1万人に援助を与えることである。同計画は、国家難民被災民援助局（ONARS）が実施に当たっている。

この計画の中心は、基本食糧の供給、病人・老人・幼児・妊産婦などへの補助給食、衣料、輸送補給業務経費である。ONARSは、現在実施中のWFP（世界食糧計画）プロジェクトから基本食糧を借り受けて、すでに配給の準備を行っている。ジブチ赤新月社が補助給食を行っており、生活水の供給は、UNHCRの給水車1台を配置転換し、EECから寄付されたゴム製水入れ容器を活用することによって確保されている。公衆衛生と保健に関しても、現地のWHO顧問と連絡を取りつつ、確実なモニタリング・監視体制がとられている。

エチオピア難民が今では自国に次々に帰還しているため、アスエイラ・キャンプの閉鎖作業が進んでいる。帰国する家族には、2カ月分の十分な食糧が与えられている。病人や虚弱者は、しばらくの間ジブチに留まるが、いずれはディクヒルの難民キャンプに移送される予定である。補助栄養給食は今後も引き続きジブチ赤新月社が行い、医療援助が必要な場合は現地の病院で受けられることになっている。

最終的な報告と予算は、次のアフリカ緊急アピール改訂版に掲載する。

『REFUGEES』誌85年8月号より

### 夢と現実

#### 独立後の現実

ジブチが独立してからわずか1年後の1978年、この国にはオガデン戦争を逃れて4万5000人のエチオピア難民が流入した。その時点で、この国の居住者10人に1人が難民だった。1983年から1984年末の間に、自発的帰還によって2万8000人の難民が故国に帰ったが、残る1万7000人の将来は定かではなく、この小国は重い負担を担い続けている。

この2年間に、ジブチでは「難民」という言葉は、自発的帰還の同義語となっていた。長らくその発足



の可否をめぐって意見の対立があったが自発的帰還事業は、ようやく満足のゆく条件の下で発足の運びとなった。自然発生的に帰国し、エチオピア国内で帰還登録をした1万8000人のほかに、1983年9月から1984年12月までの間にジブチから「組織的な帰還事業」によってエチオピアに帰国した難民は、合計1万人以上に上る。しかし1984年9月になって帰還先の地域をひどい干ばつが襲い、再定着のための努力に支障をきたすようになってきた。それ以来、推定約1000人がジブチに舞い戻った。このうち一部は、雨期に入ってから再び帰国したが、今後も帰国する人々が出てくるものと思われる。

他方、1981年3月にオガデン地方からジブチに逃げるのびた4万5000人の難民のうち帰国を選ばなかった1万7000人以上にとって、今日解決策を見出すのは以前よりもはるかに難しくなっている。

#### ディクヒルとアリスアビエ

この残留難民の過半数を占める約1万1000人はディクヒルの難民キャンプで生活している。近くにある同じ名の町は人口わずか6000人であり、キャンプは巨大な村といった様相を呈している。キャンプには恒久的な建物や、商店、学校、無料診療所、いつも利用者が一杯の図書館もある。

ディクヒル・キャンプでは、帰還事業が始まって

から一部の難民が帰国していったが、キャンプの一角では、「テントが届き次第」アリサビエという別のキャンプに残留している3200人の難民を受け入れるための準備が進められている。

このアリサビエでも、帰還が始まってから難民の大半が帰国した。そこで、アリサビエ・キャンプは近い将来に閉鎖されることになったのである。

#### 今後の夢・見通し

では、ジブチに残留する難民の将来はどのようなのであろうか。1つの可能性としてありうるのは、帰国することであろう。昨年行われたような帰還事業が、いつかまた再開されるかもしれない。しかし、もっと現実的な見通しは、難民の定住を原則として認めないというジブチ政府の方針には反するが、難民が少くともしばらくの間はこのまま残留を続ける可能性である。ジブチは自ら干ばつの被害を受け、国内の失業率は60%以上に達しているが、この点に関して、内務大臣のユセフ・アリ・チルドン氏は、「難民の全てが帰国することはないだろう。……決して望ましいことではないが、定着化は自然に徐々に進むだろう」と語っている。さらに、ジブチ共和国大統領の私設秘書官イスマイル・オマール・ゲレー氏は、こう断言する。「我々は身の安全に不安を抱く人を誰ひとり送り返すことはしない」



厚紙やボロ布で表面を被った小枝でできた住居

## 『REFUGEES』誌85年8月号より

### アスエイラの新流入難民

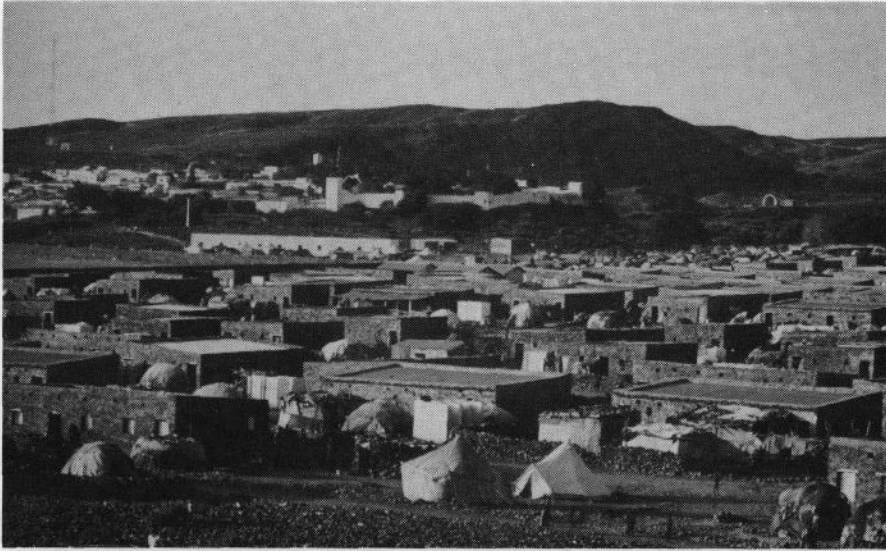
首都から30キロ弱の距離にあるアスエイラの状況は極めて深刻である。この住民自体が飢饉に苦しんでいるうえに、そこに、エチオピアから推定1万人を超える飢饉の犠牲者が流入している。

#### 1年前は500人のキャンプだった

枝がほとんど払われておらずまだ緑色の枝がついている木で組んだトウクル（小屋）は、その住人が到着して間もない難民だということを示している。6月末の「ラマダン（イスラム暦の断食月）」が終わってからやって来た」と、男たちの1人が言う。急ごしらえの小屋が作るわずかな日陰に身を寄せあう彼ら妻たち、娘たちは、起きる元気さえない。「12日間歩き通しだった」。会話は突然途切れる。唾液は貴重だから無駄にするにはあまりにも惜しいのである。熱湯のような湖水をたたえるアッベ湖の近くにあるこの不毛のコバード峡谷の熱さは猛烈である。

眼を赤くさせ、耳が膿でただれ、咳こむ子供たち。「気管支炎、肺炎、だが咳はおまけかも」UNHCRがこの地域に派遣したばかりの「国境なき医師団(MSF)」のアラン・DESTRE医師は子供たちを一目見て診断を下す。「かいせん、下痢、栄養不良……どこでも同じだ」わずか2年前には、DESTRE医師はスーダン東部のワドコウリにいた。今では、こうした事態にはなれっことなっている。食べる物がないというだけの理由で故郷を去った多くの人々は、皆一様に衰弱した体つきで、目つきも一樣にうつろである。ここには、こうした人々が1万人か、それ以上いる。現状ではその実数をつかむのは不可能である。彼らは、アスエイラの周辺に、小さなグループをなして数キロにわたってちらばっているからである。

彼らがここに流れてくるようになったのはちょうど1年前のことだった。最初は約500人ほどがやってきた。多少の配給を貰って去っていったが、再び戻ってきた。それぞれ名前も違っても、難民となった理由は変わらない。彼らは家畜を全て失ってしまった遊牧民であり、生きる手だてのない人々である。そこでジブチ当局は、アスエイラのはずれにキャンプを設置した。10月末には難民の数は2000人となり、1月末には6000人に上った。雨期が始まってから流



入は多少ゆるやかになり、中には故国に帰った者もある。しかし雨が何日も降らない、極度に不毛な地域の住民が、今やエチオピア各地に点在する配給センターや、そしてジブチ領内のセンターのほうが近い場合にはジブチの配給センターに向って移動している模様である。こうして流入してくる難民のほか、ジブチ人の遊牧民の中にも干ばつの犠牲者が出ていることを忘れてはならない。

#### 各国の援助

この事態は、ジブチにとって手にあまることである。難民の流入が始まった当初から、政府の難民被災者援助局（ONARS）は連帯の気持ちから、可能なかぎり、ジブチ国民と国境を越えて流入してきた難民を区別することはなく飢饉の犠牲者に対して援助を行ってきた。物資は、サウジアラビア、EC、イタリアなど国外からも提供があった。世界食糧計画（WEP）は食用油、米などの基本食糧を提供した。ジブチ赤新月社は、乏しい中から物資を最大限に分配した。はしかやコレラが蔓延するおそれが生じて、国民は予防接種を施したことも何度かあった。

11月～2月にやってきた旧難民の健康状態はすでに目に見えて回復している。しかし、ラマダンの月からその後にかけて難民の流入があったため、今や保健と食糧が再び最優先課題となっている。新たにやってきた飢えた人々には、まず食べ物を早急に与え、その上で治療を施し、子供たちには予防接種を行う必要がある。雨が降ったりあるいは故郷に救済拠点が設置されて再び戻ってゆけるようになるま

での間に、体力を回復させることが必要である。

難民が再び正常な生活に戻ろうと願う場合、故郷に戻ることが唯一の解決策である。現在の見通しでは、8月末には帰国が可能になりそうである。ジブチの内務大臣は次のように語る。「必要とあれば、我々は最も弱い子供たちをもう少し預ってもよろしい。帰国してゆ

く人々には、飢えずに故国にたどりつけるよう十分な食糧を供給するつもりだ。」

UNHCRは7月はじめに国際社会に向けてアピールを発しており、援助を与える予定である。UNHCRによれば、2カ月分の補助食糧（基本食糧はWEPが提供する）と毛布を支給するために、37万4000ドルかかる見込みである。

イタリア赤十字社から8月13日に2000トンの米が届くのをはじめ、さまざまな寄付が期待されている。

#### IGAADへの期待

難民が帰国したのちも、おそらく数カ月間は救援が必要であろう。何もかも失ってしまったのだから、道具や資金も多少必要だろう。遊牧民として生活してゆくためには家畜がなくてはならない。IGAAD（干ばつと開発に関する政府間機関）を構成する東アフリカ6カ国（ジブチ、エチオピア、ケニア、ソマリア、スーダン、ウガンダ）の首脳会議の開催が今年の秋に予定されており、その準備が進められているが、この際、こうした難民の帰国後の援助も、エチオピア政府と援助団体が新たに担うべき責任として認識される必要がある。今年2月に設立が決まり、ジブチに本部が置かれることになっているIGAADは、自然災害発生時における国際世論の喚起、干ばつと闘うための特別基金の設置、食糧備蓄の励行、東アフリカ地域に関する情報とりわけ気象データの分析と配布を目的としている。サヘル諸国が10年前に行ったように、干ばつの被害を受けたこれら東アフリカ諸国も、共同で干ばつと闘うことを決めたわけである。

# 私の出会った人々—オーストラリア

森山 久寿子

(日本語家庭教師プロジェクト  
コーディネーター)

今回、豪日交流基金の助成を得て、9月11日から24日まで約2週間、シドニーとキャンベラを中心にオーストラリアの難民定住政策の一端を知る機会をもつことができた。

私自身の準備不足もあって、多くの方の協力を得たにもかかわらず、表面をなぞっただけの訪問になってしまったように思う。突っこんだ形での報告は残念ながらできないと思うが、現在日本にいる定住難民の問題が少しでも改善していくために参考となるようなこともいくつかあった。良きにつけ悪きにつけ、オーストラリアの定住政策から学ぶべき点は多いに学び、日本の定住難民の問題を共に考えていくことができればと思う。

## <ちがいは何か！>

インドシナ難民の第3国定住への道は、各国が受け入れをしぶりだしている状況からますます困難になっている。オーストラリアはその中であって、1984年～1985年の計画では、難民及び特別な人道問題（ポーランド、エルサルバドル、チリからの亡命者）に類する人々の受け入れ枠を、1万4000人としている。（前年度は1万5485人）

難民以外の移民も合わせての受け入れは前年度の6万2350人よりも増えて、7万4000人となっている。（今年度に関していえば、計画中なので、最終的な数字は変わってくる）その様な状況なので、とり立ててインドシナ難民の定住を問題にはしていない。世界中からの難民を抱えて、そのケース毎に、真剣に取り組んでいるということである。

難民の受け入れ体制も、長年移民を受け入れてきた歴史的経験もあるのでゆき届いている。政府と民間あるいは民間同士の連絡も密で、それぞれの立場から何が一番有効か話し合い、協力している。

日本では各団体の相互乗り入れがうまくいっていないので、こうしたオーストラリアの柔軟な姿勢をうらやましく感じた。お互いの活動の評価に対して、一方的に批判するのではなく、各々のできることで連携プレーができれば有機的に問題解決していくことだろう。

今春、政府は日本への難民受け入れ枠を1万人に

拡大すると発表したが、実際にアフターケアの面で定住者と関わる民間に積極的な支援がないのは、残念である。

## <地域でできること>

キャンベラの中心から車で5～6分、ポートンという所にある英語予備学校を訪ねた。以前は音楽学校だったという。こじんまりとした平屋建ての建て物は、学校というよりも、近所の人が気軽に出入りする集会所という印象のものである。この予備学校は、英語がよくわからないため授業についていけない子供たちのために1976年、教会組織の建物の一部を借りて始まった。

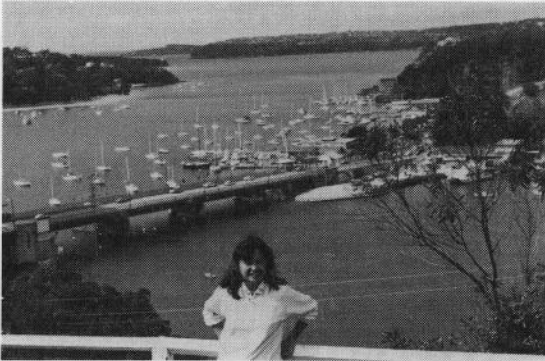
今までに1000人以上の修了生を出し、生徒の出身国も約20カ国にわたっている。生徒の大半は、移民と難民で占められている。勉強期間も初級の3カ月を終了した後更に6カ月受けることができる。状況によっては、期間と内容を検討され、さらに勉強できる。年齢も12才～20才までと幅広くその生徒の語学力にあわせてクラスを編成している。

彼らは、英語の勉強を修了すると自分の家にもっとも近い学校に推薦されて入っていく。小学生の場合は、正規の学校の授業が終わった後、この英語予備学校にくることもできる。

教材も豊富であるが、教師自身が独自の教材を編み出して作っている。この様な体制を保つための支援、特に教材などを政府が発行し無料で配布している。だからといって、財源が豊富なわけではない。図書館の蔵書も20カ国語近くを集めるとなると、仲々大変である。



案内書は各国語で表記されている



その様な時に、常に支援してくれるのは、英語予備学校友の会である。教師、両親、難民受け入れの時の保証人、記者、役人、政治家、福祉担当者など多種多彩な人で構成され、この学校を支援する。地域ぐるみの支援体制ができているのである。また、英語の授業の他に、数学、理科、歴史、地理などの勉強もできる。さらに、音楽、スポーツ、踊り、料理、工芸などの課外授業を選ぶこともできるし、興味のある場所を訪ねたりすることもできるなどユニークなプログラムも持っている。

ある女教師にいくつか質問を試みた中で、印象的だったのは、教材の中で性差別などに注意して教えていることであった。例えば、家庭の中で皿を洗うことは男女ともやるし、そうじも一緒に、どちらか一方がやるものだというようなことは教えていない。男女一緒に、ということを見せていくと、最初は両親の抵抗もあるがそのうち判ってくれるそうだ。

言葉はその背景をぬきにして身につけることは不可能だと思う。自分の視点や人生観社会観が、教材を通して相手に伝わっていく。その意味では、私たちの日本語を教えるという活動は、一人一人の社会に対する視点を明確にしていく作業でもあると思う。

この学校のもうひとつの特色は、学校運営に携わる人が、教師だけではないということである。地区のボランティアたちが、授業だけではついていけない子供や問題をもつ子供のために個別に世話をしている。きめの細かい配慮である。こうして勉強を終える頃、彼らを受け入れる学校の先生が英語予備学校にきて、受け入れのための準備をする。

#### <センターに入るか直接定住か>

定住するインドシナ難民の98%が、各地区にある移民センターに入る。ここで11週間から、最高26週間まで滞在し、その間に語学の勉強、健康管理、家さがし、仕事さがし、地域での生活のための必要

なサービスの紹介・利用などの特典をうける。

片や、割合からいくと少ないが、直接定住というのがある。この場合、難民定住促進のための組織が、地域に働きかけて、難民をうけいれてくれるスポンサーを募る。スポンサーになると食べ物、衣類、住居、仕事の世話から、歯医者(?)銀行口座、子供の学校入学まで面倒をみなければいけないが、政府のサービス機関も整っているので、日本の状況とは違う。

#### <家庭教師>

日本語家庭教師プロジェクトに似た形態として、家庭教師組織がある。これは、「成人移民教育サービス」と呼ばれる英語教育のための機関のひとつで、独自に教室をもったり、地域で無料託児所を併設しながら、母親のための英語教室、職場での英語研修、遠隔地に住む人のための教材開発、妊婦のための言語プログラムなどをやっている。

家庭訪問形式の活動は、いろいろな状況で外に出て学ぶことのできない人を対象に行なわれている。

週に1回、2時間の学習が基本的な活動である。この組織のコーディネーター代理のハオレイ夫人の話では、現在、300人近いボランティアを抱えながら、まだまだ足りないということである。「ボランティア求む」のポスターや案内書をみせながら、彼女は溜息をついた。

ボランティア希望者は、活動をしたい旨申しこむと、週2~3時間の研修を、約6週間受けなければならない。研修期間としては、十分ではないが、現状では仲々、改善できないとも言っていた。研修内容は、教授法、プログラムの立て方、教材の使い方など基本的なものである。この研修が終って、いよいよ家庭訪問である。1回目の時にはそのためのシートもある。一人で訪ねていくのだが、その時に忘れてはならないものが、ボランティアですよという身分証明書と笑顔!(とシートに書いてある)である。

#### <ICRA>

行きたい所も会いたい人も、まだまだたくさんある中で、オーストラリア最終日に訪ねたのがICRA(Indo-china Refugee Association)である。

シドニーの中央駅から30分、電車で揺られてバンクストンという町へ降りた。驚いたのは、街行く人のほとんどがアジア系で、白人系の姿があまりみうけられなかったことだ。商店街も中国人や中国系ベ

トナム人のお店が目立つ。そんな商店街のお店とお店の間の階段を登った所にICRAがある。

ICRAは、1975年南部オーストラリアに設立されたのを初めに、次々と各州に設立された。ICRAは、非政府団体で、宗教や政治色を排している。

インドシナ難民というと、それだけで、いっしょにされてしまうが少しでも実情を知る人ならば、彼らの内部が、多くの政治的なグループに分かれてしまい、相容れないことを嘆く。ここを訪問する数日前にも、カンボジア人のミーティングで、まっぴがつつにグループが分かれている場面に出くわした。ふつうの一軒家を一時的なお寺として、みんなの集会場などにも使っていたらしいが、本格的なみんなのお寺を建てようという話しあいに、各々が自分の言い分を譲らず、決別してしまったのだ。

ミーティングを調整したコミュニティーワーカーに言わせると、ミーティングをもつこと自体も困難なのだという。

ICRAのコーディネーターは、地区集会で選出されたものがあり、その人がスタッフを集める訳だが、難民もひとつの雇用の機会として、採用される。

そのための、職業訓練も行なわれる。この事務所は、みんなのたまり場でもあり、相談事を持ちこんでくる所でもある。現在のプログラムは、月に2回の法律相談、職業訓練をかねている、週に3回のタイピングクラス、金曜日の夜7時から9時までと土曜日午前9時30分から11時30分まで学科別の宿題対策クラス、舞踊教室などがある。

本来のICRAの目的は、難民が定住する地域で差別されることなく暮していくための働きかけ、適正なスポンサーシップ支援の促進、難民がオーストラリアにきてすぐに必要な食事などの一時的な援助、地域の人々の難民に対する理解の促進、従来ある地域組織ベトナム、ラオス、カンボジアなどの組織の間の相互理解の促進などである。上記の目的に沿って、事務所でいろいろな企画が行なわれたり、ニュースレターの年6回発行や、各国語による辞書、科学技術用語集などの発行、販売、必要な物品の配布、難民の引っ越し費用を貸しつける基金の運用など多岐にわたっている。

そして、ここでもボランティアにスタッフと同じ様にこの活動に参加することを呼びかけている。

<親のない子は、どうやって世間を渡っていくか>  
シドニー中央駅から30分、車で約5分ほど行くと

バラマタという町の一角を占める、保護者のない子供たちのための建物がある。お城の様な事務所の隣に、やはりきれいな建て物がある。そこは、カンボジアからきた保護者のいない子供たちが、10数名生活をしている。他にもいろいろな国の孤児たちを預かっており、各々に建物がちがう。

ここから、学校に通い、卒業して仕事をみつけると、友人と一緒にアパートを探してこの建物を出ていく。1982年以来今までに191人のインドシナ難民の孤児を受け入れている。

ここに「彼らは何を考えているのだろうか」という調査がある。調査項目をみると、質問内容に思いやりや相手の必要性を本当に知るための配慮がみられて、調査というものの意義を考えさせられる。



公園のような移民センター

例えば、学校のことについての質問で、「あなたはどこで宿題や勉強をしますか?」、「どのくらい時間を費やしますか?」、「誰かが手伝ってくれますか?」とか、精神的な質問の所では、「眠れますか?」、「頭痛はないですか?」、「学校は休んでないですか?」などと続く。

厳しい質問もある。「あなたは自分の国を離れてしまったことを正しいと思いますか?」、正しかったと思うと答えた子は103人。

日本の場合、正確な数字は手元にないが、ポートピープルの形できた子供たちの中には、親の所在の判らない子もいる。親戚の人と暮らしても、仕事で忙しかまってやれない。外に出て遊ぶでもなく、家の中にポツンとして、テレビをみている。少しでも家庭の味を味わえたらと思う。そんな子供たちのために週末だけでもいいから、第2の彼の家になってくれるような人との間をとりもつようなことができなだろうか。オーストラリアでは孤児とは言いながら、共同生活を送ることができる状態がうらやましく思う。

### <もうひとつの出会い>

「オーストラリアの定住政策を知りたいのですが」と訪ねた移民情報センターの、チフォリさんは、イタリア系の元移民だった。今から約20年程前、オーストラリアにきたという。

難民定住のことを知りたいと言った時、オーストラリアと日本の地図を書いて、「大きさが20倍違う」と、一見とんちんかんな回答をくれた。ポカンとしている私に、ゆっくり説明してくれたのは、難民や移民を受け入れるオーストラリアの批判だった。日本で言えば、在日韓国、朝鮮の人と同じで、肉体労働や下働きする人材がほしかったということ。

「オーストラリアの定住政策が、良い政策だと思っ

てはいけない。それぞれに考えがあってやっているの

であって決して、日本の場合と比較しないで」と

いう彼の発言には、自分が、移民としてきた時の経験

が含まれている。彼の発言だけでなく、ソーシャル

ワーカーと定住者の就職状況と話した時も、定住者

がつける職種は肉体労働や単純作業が多いというこ

とだった。それはなぜかという問いに「言葉ができ

ないから」という答を皆がした。「本当にそれだけ

で就職できないのか」と言うと、皆答に窮して首を

横にふるのだった。ある民間団体の代表者は、

自分の両親は10年前は、中国人のレストランへ入る

のも嫌がっていたが、最近では、抵抗がなくなっ

ている、「少しずつ変わっていったらいいよ!」と力を

こめて言った。

よく聞く発言に「第2次世界大戦の時の責任をと

らなければいけない」というのがあった。戦争に加

担することによって難民の歴史を生み出したという

認識がある。ベトナム戦争しかりである。

「日本も戦争に参加しただろう、その責任はどう

なってるんだい」という意見に、何も言い返せな

かった。



L. ハーディさん(左)とベトナムの青年



### <ファースト・フード街>

シドニーの街の一角で中国系の人達が商売をして

いる。中国人街である。

通りの入り口にあるビルは、全部、飲食店なの

だが、1階にあるファーストフードレストラン街には

ラオス、ベトナム、カンボジア、中国、日本の料

理店などが、肩を並べて店を出している。

カンボジア料理の店主に「カオイダンキャンプで、

JVCのメンバーと一緒に働いたよ」と言われて話が

はずんだり、日本料理の店に日本人はおらず、韓国

人が働いていたり、その食堂街をぐるっとみて回

るだけで、話題は尽きない。

### <また、あとで!オーストラリア>

滞在期間の短かさのわりには、多くの団体、そ

こで働く人たちに会え、話をすることができた。そ

してそれは私にまた新しい可能性を見出させてくれた。

滞在中、私の希望をかなえてくれるためにキャン

ペラでスケジュールを組んでくれた、ハントさんと

ハーディさん、ソベイ夫人、日曜日の朝8時に事務

所を開けてくれた移民情報省のチフォリさん、会議

中に時間をさいてくれたホブキンス夫人など本当に

大ぜいの人のお世話になった。

「今後も情報交換をしていきましょう」と約束し、

「暮らす所は違って共に活動していきましょう」と

言ってくれた人々。またこの様な出会いのチャン

スを設けてくれた豪日交流基金と吉田新一郎氏にこの

場を借りてお礼を言いたい。

難民問題を通して、多くのことを知る機会を得た

が、問題の解決のために今の自分ができるところを

みつけ直す機会を与えられた。今後各々の生活の場

で日々、苦悩しながら活動を続けている人達や定住難

民と共に語りあえる場が、もっともっと持てたらと

思う。

# タイ・カンボジア国境難民村での栄養調査に参加して

浜野 敏子

(補助給食プロジェクト 栄養指導員)

## 派閥ごとにまとまっているキャンプ

昨年11月にベトナム軍の攻撃によって、タイ・カンボジア国境にあるカンボジア難民村が全村崩壊して以来、住んでいた人々は避難所を転々とし不安定な日々を送っていました。最近になってやっと新しいキャンプ地も決まり、人々は腰を落ち着けて生活の再建に取りかかっています。現在約20万人いる難民たちは、派閥ごとに4つのキャンプ、サイト2・7(ソンサン派)、サイト8(ボルボト派)、グリーンヒル(シアヌーク派)にまとまっています。

緊急事態を一応脱した現在の状況の中で、UNBRO\*の呼びかけで、国境の補助食配給(SFP)、医療プログラムを担当している各民間団体、各キャンプのクメール人自治組織、クメール婦人協会(KWA)が協力して、全キャンプを包括した本格的な栄養調査が行われました。

今回、JVC/SFPのスタッフとして、サイト2(6月5, 6, 7日)とサイト8(7月23, 24日)の2つのキャンプの調査に参加する機会を得たのでその印象等を簡単に報告します。

## 栄養失調児の多いノンチャン

調査の目的は、①キャンプの5才以下の子供の健康・栄養状態を把握すること、②今後のキャンプの栄養改善・向上計画を立てることの2点です。調査の内容は、5才以下の子供の身長・体重測定と、43項目にわたる子供と母親の健康に関する質問です。これらの調査を、クメール人と外国人スタッフで構成されたチーム(リーダー、記録者、測定者の3人が1組)が、一軒一軒を家庭訪問して行います。

調査実施日前に徹底的な打ち合わせとトレーニングが行われます。調査当日は朝の8時にスタッフ全員がキャンプの事務所に集合し、各チームは無線ラジオ、調査用紙、折りたたみ式の身長測定器、体重測定用のつるしばかり、カゴ、と大荷物を携えます。そして麦わら帽子をかぶり、水筒をつるした12チームの実践部隊が、用意万端いざ出発と、一斉に村の中に散っていきます。1チームの1日の対象人数は30人です(この数は村の子供の10%に当たります)。

調査の結果は、いわゆる第2, 3段階(体重/身

長比)の栄養失調児の割合で示せば、サイト2に属するキャンプのうちドンラック6.7%, サイロー5.1%, バンサンゲー5.7%, ノンチャン8.8%, そしてサイト8は4.4%でした(参考までにサイト7は4.8%)。JVCが担当しているノンチャンが群を抜いて高い割合だったことは、予想していたこととはいえショックでした。一体どうしてこんなにノンチャンが悪いのか。生活の設備や供給される食料、医療サービスにそれほど大きな違いのないキャンプ間で、一体何が子供たちの健康状態を左右しているのだろうか。

## 問題のある食料の配給方法

私が見たこと、聞いたことや他のスタッフとの話し合いの中から少し考えてみます。

まず、人々の基本となるUNBRO・SFPの食料がどのような形で村の中に入っているのかといえます。UNBROは、14才以上の婦人1人に対して2.5人分の食料(米、豆、油等)を配給しています。この量は計算上、村の必要量を十分に満たすものです。しかし問題はその食料が公平に村人にいきわたっているかということです。ある家庭では4人家族で婦人が2人いるので、5人分の食料を受け取っています。余った米は加工してお菓子を作りマーケットで売っています。一方である若夫婦の家庭には、7才、5才、4才、2才と小さな子供が4人。母親1人が受け取る2.5人分の食料を6人で分けなくてはなりません。当然家族全員に対する米の絶対量が足りなくなって、その不足分を他の家庭から買ったり、配給カードを買ったりということになります。SFPの役割の1つは、このようなUNBRO配給の不公平を是正する意味が含まれています。つまり配給カードの枠組みから外れている子供たちに補助食料を配給するということです。しかし、家庭の中で主食となる米が足りなければ、SFPで受け取る野菜や果物、卵を売ってそのお金で米を買います。するとその家庭の食事は米ばかりになってしまい、子供たちは小さな胃袋を米でいっぱいにしてしまうので、結果として十分なカロリー、ビタミン、ミネラルをとることができません。さらにSFP配給食料のうち、子供

たちの栄養改善の鍵を握る離乳食用の食物がどこのキャンプでも無駄にされていることがわかりました。それは人々の好み、調理技術、習慣等を軽視した結果でしょう。

### 家庭や村の環境も健康に大いに関係

子供の健康状態を家族環境から見たとき、父親の役割が大きな要因になっているようです。直接的には母親が子供の世話を十分にみられる余裕があるかどうかということです。父親が留守だったり、母親に対する理解がなくて、家に居ても何もしないような場合、母親に大きな負担がかかります。たとえば父親が兵士の場合（普通3カ月の勤務のあと3日程度の休暇があって家に帰って来ます）、留守中は母親が家庭の全責任を負います。食事の支度、水運び、まき取り等、これらの仕事に費やす労力と時間は相当なものです。母親が忙しければ、子供の食事の世話だけでなく、子供の健康状態をよく観察するといったことも十分にできません。子供の具合が悪くなってもすぐに病院に連れて来れず、手遅れの状態になってしまいます。調査中に見つけたある重症の栄養失調児の母親は、家を空けている間に泥棒に入られるのが心配で子供を病院に連れて行けなかったと弁解していました。

このような家庭環境を支える村の治安や村人同士の人間関係はどうなのでしょう。それはその村の自治組織のあり方が反映しているようです。自主的で活動的な自治組織を持つ村では、共同で畑を作ったり、ソーシャルワーカーが貧しい家庭を見つけて救済活動のようなことをしています。ノンチャンの場合、ソンサン派の拠点ということもあって、自治組織が軍に牛耳られているといった問題を抱えています。

サイト8の場合、ここはポルポト派の村で、村の雰囲気も他とはかなり違います。村人たちは貧しい層の人々で、生活ぶりは他のキャンプに比べて質素です。他のキャンプでは、避難して2、3カ月もたつと人々は金や銀のアクセサリーを買い出しますが、ここの人はそのようなものは持っていませんし、家の中にもほとんど“物”というものが見当たりません。また、ここの村人たちは、サイト8に移って来る以前はSFPを断っていて、食料配給、栄養教育は受けていませんでした。このようなマイナスの要因があるにもかかわらず、サイト8の第一印象は子供たちの健康状態が全体的にとっても良いということでした。

ひどい栄養失調の子供や、他のキャンプではまんえんしている皮膚病もそれほど目につきませんでした。先に述べたように、調査結果はキャンプの中で一番良いのです。その理由の1つとして、村の自治組織の自主性があげられています。



### 今後は村全体への働きかけも

子供たちの健康を守るためには、自分たちの健康は自分たちで守るという村人の自覚が大事な点なわけなのです。今後の私たちの活動を考えるとき、個人個人に対する働きかけにも増して、村全体への働きかけ、具体的にはクメール人の自治組織やKWAとのより密接な協力関係、さらに自治組織そのものを刺激していくこと、そして彼らにより多くの仕事の責任を移していくような方向を目指すことが大切となるでしょう。

今回の調査は、私たち外国人スタッフにとってはクメール人の生活を実際に見られるまたとない機会であったし、クメール人スタッフにとっては保健指導員として働く上での技術、知識の習得の機会となりました。そして何よりも、クメール人と外国人スタッフが1つの目的に向かって、一心同体となって調査を進めていくなかで生まれた連帯感大きな収穫だったように思います。

\* UNBRO — United Nations Border Relief Operation

## JVCの活動とその目的に御理解を

▶**JVCとは**— Japan International Volunteer Center は1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金他によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶**JVCの会員募集について**— 会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 ( 一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円  
          団体会員 30,000円 学生会員 3,000円 )
- ・賛助会員 金品による支援 (金額は自由です。)

▶**機関誌『Trial & Error』のみの購読について**

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶**送金の方法**— 下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名-JVC会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名-JVC東京事務所  
(住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい。)

▶みなさまの募金が支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. **アフリカ難民救援募金** (9月小計 94,787円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. **インドシナ難民救援募金** (9月小計 0円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- C. **クロントイ・スラム募金** (9月小計 306,000円) バンコクのクロントイ・スラム内の図書館の運営およびスラム立退き者のための建築資材購入費に使われます。
- D. **テッグ・スラム奨学金募金** (9月小計 9,000円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- E. **日本語家庭教師募金** (9月小計 0円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- F. **医療募金** (9月小計 0円) 緊急事態が発生した場合、速やかに医師を派遣したり、医薬品などの緊急救援物資を輸送するために使われます。
- G. **ボランティア募金** (9月小計 5,000円) 現場で活動を続けるボランティアの健康管理費にあてられます。
- H. **JVC運営経費募金** (9月小計 30,000円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- I. **無指定募金** (9月小計 700,587円)

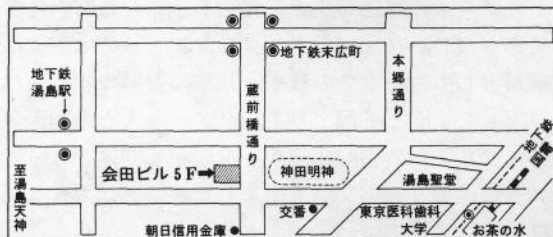
▶**送金の方法**— 下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。  
東京9-27495 (募金種目名をご記入下さい。)  
加入者名-JVC東京事務所

## 編集後記

▶文化祭のシーズンである。あちらこちらからパネル貸し出しのお声がかかる。アフリカ難民に関する問合せも多い。この号がもう少し早く出ていれば参考になったかもしれないと、発行が遅れてしまったのが残念である。次号はソマリア特集の予定。

▶今回の特集号は今までと編集の方法が違っている。UNHCRが全体の構成を担当し、JVCは森山と浜野のレポートの部分を受けもった。皆さんの感想をお聞きたい。

▶53号のお詫びと訂正 7ページ右段9行目プログレッションセンター→プロセッシングセンター 同注) 各救援機関の連合体→アメリカ内務省の難民教育機関。



昭和60年10月20日発行 (毎月20日発行)

編集人 前川 昌代

発行人 星野 昌子

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所  
〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階  
☎03(834)2388 Telex: 2323187 JVCHQ J

バンコク事務所 JVC THAILAND

67 South Sathorn Road

Bangkok, THAILAND

☎(286) 4857

Telex: 87032 COMSERV TH

ソマリア事務所 JVC SOMALIA

c/o UNHCR P.O. Box 2925

Mogadish, SOMALIA

Telex: 794 HICOMREF SM

エチオピア事務所 JVC ETHIOPIA

c/o Embassy of Japan P.O. Box

5650 Addis Ababa, ETHIOPIA

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

＊本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

定価 送料共500円



